



湯
け
む
り
の
ま
る
で

まるで
湯けむり。

別府を訪ねた
3つの短い旅の記録

はじめに

鶴見岳の山頂からすぐの眼下に広がるのは、いたるところに立ち上る幻想的な湯けむりと、遠くに四国を望む別府湾。

街に降りれば、そこは少し寂れた繁華街のようであり、夜にもなると観光客と地元の人が路地裏のネオンで交錯する。

広すぎず、遠すぎず。

狭すぎず、近すぎず。

この距離感が、心地いい。

この小さな本は、

性別も出自も住んでる場所もバラバラな3人の書き手と3人の写真家が、

3日間、それぞれのやり方で、

九州は大分県にある温泉街・別府を旅した、その記録です。

まちをすみずみまで歩きながら、

そこで暮らし活動する人々と話しながら、

ありきたりな「観光地」としての姿だけにとどまらない、

別府の「よさ」について考え、探してみました。

ぼくたちは湯けむりのように、

この街を訪れては去ってしまう旅人だけれど、

旅の記憶はけっして湯冷めすることなく、

いつまでも身体の奥にとどまり続けるのです。



まるで湯けむり。
もくじ

p.005 | Chapter 01
はじめまして、故郷

文 青柳文子
写真 齋藤陽道

p.043 | Chapter 02
正直、帰りたくないっす

文 夏目知幸
写真 清水はるみ

p.079 | Chapter 03
極楽酩酊別府地獄

文 戌井昭人
写真 田附勝

p.038・074 | Column

別府の「B面」ちょっといい話。

Chapter 01

はじめまして、故郷

文 青柳文子
写真 齋藤陽道



「別府」という街の輪郭を掴みはじめたのは、10歳前後のことだった。社会科の授業で九州の地図を作ったとき、ふとモノレールがないことに気がついた。そういえば電車も減多に乗らないし、地下鉄もない。この土地は一体なんなんだろうと思ったのだ。それに、「文子ちゃん」は本当に言葉が綺麗ねえ」と保育園の先生に褒められていたという母の話に違和感を覚えたこと。方言

5歳くらいのころ、私は東京の品川から別府のおじいちゃんの家に移り住んだ。わけあって、着のみのまま、お友だちにお別れも言えないまま、気がついたら私の家はそこになっていた。ついでに名字も変わった。悲しいことに、別府での最初の記憶は、たんすの前で東京に帰りたい、パパに会いたいと泣きわめいているシーンである。とはいえ子どもの適応能力はすごいもので、少し経つとわけもわからぬままに元気いっぱい、新たな保育園に通い、小学校に上がって、いつのまにやら私は立派に別府の人となった。





標高1375mの山頂からは別府市内を一望できるほか、晴れた日には四国も見渡せる。ロープウェイ運賃は往復で大人1,600円、子ども800円。
●別府ロープウェイ/別府市大字南立石字寒原10-7 [map. 1/A-b]

が当たり前になっていた私は、「今のこの言葉遣いは綺麗ではないのかよ」と、別府で過ごした数年間にネガティブな印象を抱いてしまった。

もちろん、ポジティブな出来事もあった。「別府らしさを誇る」というテーマの課題で「湯けむりが立ち上る景色」について書いたら、賞を獲った。といっても、自分では別府らしさなんてまだ全然わかっていなくて、母に考えてもらった内容だった。湯けむりはほかの街にはないもので、良しとされているものらしい、なんて思ったりもした。

ここはどうやら、良くも悪くも私が生まれた街とは違う。そのころからだった。再び、東京が私のなかで大きくなっていった。はやく大人になって、生まれ故郷に帰るんだ。そんな「自分の居場所はどこではない」という感覚がいつも心のどこかにあった。

20歳を前に無事に上京を果たし、気がつけば既に10年以上が経つ。東京で





小学校や中学校のそばには、どこも大抵小さな駄菓子屋さんがあって、放課後はそこで買ったお菓子を持ち寄って遊んだ。小中高を通して私たちが足繁く通った「しまだ」は、思い出の場所として真っ先に挙がる場所。限りある

今回の帰郷が今までと違うのは、はじめての出産を経て、子どもと一緒に過ごすこと。私から産まれたもうひとりが、瞳に故郷を映し出す。大きな違いは、私はこの土地の多くを知っていて、彼女は知らないということ。私もまったく別の人格を持ったような気持ちになって、懐かしい道のりを歩いた。

自分の世界が色濃く鮮やかになるにつれ、所在無く過ごした青春時代の思い出も、断ち切られたかった人間関係も、美しい思い出にすり替わっていった。

いや、すり替えていく作業を重ねてきた。幾度となく帰郷しては、「故郷」の都合のいい消費を繰り返した。ここではない場所を目指して、見向きもしなかったこの街に言い訳をするように。







お小遣いのなかで最大限に豪華なお菓子ラインナップを揃えるために頭を使うことで、私たちの算数力は培われた。ややふくよかなクラスメイトのA美ちゃんが、1000円を握りしめて爆買いしているのを見かけたときは、なるほど、だからかあと何かを悟り唸った。少しませたM里ちゃんに「甘い太郎」の残り汁の上手な取り方を披露されたときは衝撃が走り、この子には逆らってはいけなさと感じた。天真爛漫なF子ちゃんが、セーラー服でスルメをかじる姿はとてもしんどで、そこはかとなく格好よく思えて、すぐさま真似をした。その後しばらく、放課後にスルメを食べながら帰るのが私のなかで大流行した。スルメくさいことは勲章だと思っていた。

私の兄やその友人たちのしまだでの振る舞いは、それはそれはこなれていて、おばちゃんと兄グループのやりとりには粋なもののさえ感じられて懂れていた。「青柳君とこの妹やろ」とおばちゃんに存在を覚えてもらえているのが、周りの子に一步差をつけたような気がして誇らしかった。大人になって久しぶりに訪れたときもそれは変わっていないで、あの兄たちの妹でよかった☆と思うのだった。とにかく、ここが私たちの世界の中心だった。

この旅でも、真っ先に足を運んだ。敷居をまたぐと、当時と比べて少し小さくなったように見えるしまだのおばちゃんが迎えてくれた。小銭を握りしめた子どもに、あのころと変わらない声でエプロンのポケットからおつりを出す。私たちが通ったところと何ら変わらない光景が、途切れず続いていることに安堵した。

向かいの小学校からは、元気な子どもたちの声がする。都会に比べれば閑散とした地方の街を訪れると、どうしようもない寂寥の念に襲われたりするけれど、ここはむしろ活気さえ感じられて、心から嬉しかった。彼らも私たちと同じように、この場所から世界を広げていくんだろうか。

中学、高校の近くには、街を縦断する大きくも小さくもない川が流れてい





大正5年創業の老舗。現在の店主・友永 亨さんで3代目。開店と同時に地元民で賑わい、正午を前に品切れ多数。あんぱん90円～、食パン(1/4)140円～。どれも絶品。●友永パン屋
／別府市千代町2-29[map, 2/E-c]

学校で仲間はずれにされていたときは、昼休みにひとりでお弁当を食べるのがどうにも耐えられなくて、いわゆる便所飯をしていたこともあったのだけど、それにも疲れたころには、昼休みにはもう早退するようになっていた。

もあつたな。

て、10数年振りにその川沿いを歩いたら、きゆうとするような思い出の洪水が起きた。センチメンタル決壊。学校からほど近い橋の下には、いつも憧れの先輩たちがたむろしていて、ドキドキしながら「ただの帰り道ですけど何か?」「みたいな顔でわざわざそこを通った。その先には恐い女の先輩たちがいて、「あの1年の生意気な奴」とヒソヒソ後ろ指差されたりもして、男の先輩たちとは逆の意味でドキドキした。まあまあ校則違反をしがちな生徒だったので、先生に全速力で追いかけて上履きでこの川まで逃げて来たこともあつたな。





けれど、家に帰ると心配されるから、橋の下に隠れては、浜崎あゆみの「居場所がなかった〜♪」という歌詞の曲を聞きながら、泣いていた。自分に重ねられない歌詞は都合よく無視して、悲劇のヒロインの気分を盛り上げながら時間をつぶした。「未来には期待できるのか分からずに」という歌詞のある曲だったけど、いつかこんな自分を笑えるときが来るはずと思いながらの行動だった。

女子高生といえば、いささか奇妙な習性がある。別府の女子高生のスカートは昔も今もやや短くて、冬の間の彼女たちはいつだって道路の排水溝の上に立っている。よく注意して見ていると、高確率でそうだと思う。別府の街の地下には大体どこでも温泉が流れていて、排水溝から湯けむりが上っていることが多々。その上に立てば、たちまち温泉の蒸気に包まれて暖かさここに極まれり。皆、そこで暖をとっているのだ。それは、街をうろつく猫も同じ。猫が寝ている場所の下には温泉が流れているというのは、ご老人たちの間の通説である。

たくさんの元気なおじいちゃんおばあちゃんが生き生きと暮らすこの街。別府を牛耳っているのは、紛れもなくシニアの皆さんである。敬意を込めてそう言い切りたい。悪い意味でなく、彼らの言うことは絶対なのだ。いわゆる「ジモ泉」に入ると、人生の先輩方からの有り難い洗礼を受ける。ネイティブ発音の別府弁で、「あんたそんなお湯埋めたらいけんちゃ。ぬきなくなるやろがえ」と叱られたならば、別府文化に触れる門は開かれたようなもの。裸どうし、お湯に浸かって心を開いて会話すれば、止めどない世間話にコミュニケーションションスキルも磨かれるし、ローカルリアルタイムホットニュースだって手に入る。別府を訪れたなら、綺麗で整った温泉はさておき、絶対に通ってほしいセクションである。



ちなみに、暖かい季節になると上半身裸で洗面器を抱え歩くおじいちゃん
たちはこの街の風物詩なので、見かけたらさりげなく横目で、長年の温泉通
いで磨かれたツヤ肌を目に焼き付けておいてほしい。

まじめな話、温泉観光地に育ったお陰で、培われたことは数えきれない。
だって、初対面の人たちと素っ裸で同じお風呂に浸かって、赤ちゃんからこ
年配まで、いろいろな国の、いろいろな裸を眺めていれば、自然とあらゆる
ものをスッと受け入れられるようになる。どんなに嫌いな人だって、素っ裸
で向き合えば、もはや何かを取り繕ったり構えたりすることは、甚だおかし
いことなのだ、身体で感じられるのだ。温泉の中でするよもやま話はいつ
だって、相手を慮って、かつ自分もまた慮られて、あたたかなものを渡し合
えるものだった。

週末は、おばあちゃんと色々なところに出かけた。別府に唯一残っている





映画館「別府ブルーバード劇場」は、思い返せばいつも2人で行っていたような気がする。私が子どものころはまだ入れ替え制ではなくて、劇場内に何時間だっていてもいい仕組みだった。

上映する映画は、館長の照さんがさまざまな映画を観て選んでいて、メジャーではなく、小規模な作品が多い。その感度は東京の通なミニシアターに負けず劣らず、むしろそれ以上だと思う。お客さんが少ないときに行くと、受付に誰もいないことがあって、これが別府らしさだよなと嬉しくなる。入り口のドアには照さんの携帯番号が書かれた貼り紙があって、電話すると出てきてくれる。以前一度、上映時間に遅れて行ったときは、ほかに誰もお客さんがいなくて、私が着席してから上映してくれたこともあった。おばあちゃ





旅の終盤、私はある坂道に立っていた。別府の街は山から海へとならかな傾斜になっていて、思い出はいつも長い坂道の途中にあった。眠い目をこすりながら歩いた通学路は、海から昇る朝陽に照らされた夏の朝の匂いが好きだった。帰り道、目線の先には扇山と鶴見岳がそびえ、山の稜線の奥に沈んでゆく夕陽を追いかけるように家路につく。振り返ると海が見える。海の

んと何を観ていたのかはまったく覚えていないけど、ここは大切な場所として記憶されていて、今も帰省の度に思い出が更新されている。東京では名画座が相次いで閉館されていくけど、この街であのときのままだに残り続けるこの映画館は、これからも絶対になくなってほしくない場所で、皆も別府を訪れた際にはぜひ映画を1本でも2本でも観て帰ってほしい。



別府市公会堂の裏手、真っ赤なポストが目印。早朝6時から23時まで営業（途中昼休憩有）で、多くの常連客で賑わう。お湯はやや熱め。入浴料130円。
●上田の湯 九日天温泉／別府市上田の湯町15-8〔map. 3/ B-b〕

別府で唯一残る昭和24年創業の老舗。上映する映画はすべて写真の館長・岡村 照さんがセレクト。好きなジャンルはドキュメンタリーものだとか。
●別府ブルーバード劇場／別府市北浜1-2-12 [map, 4/D-d]





市内を一望する立石山中腹に位置し、アトラクションも充実。夏になるとプールも楽しめる。入園料は、ケーブルカー往復券付きで大人1,300円、子ども600円。●別府ラクテンチ／別府市流川通り18 [map. 5/B-b]

先には隣町の夜景が輝く。はじめてできた恋人とは、この坂道を無言で歩いた。はたと、同行する撮影クルーに対し、こんな極私的な目線で街の紹介をしてもいいものかと我に帰る。どうあがいたって、同じ温度を感じてもらえるはずないんだよな。でもでも、この街の観光地的な側面は、暮らしていた私たちにとっては一面的で、街の色や文化を作っているのは紛れもなく暮らす人々なのだからまあいいか、とかなんとか思いつつ、カメラマンの齋藤さんの方を見た。私が日がな目にしてきたその風景に、一生懸命シャッターを切っていた。なんだかとても嬉しかった。

齋藤さんは、生まれつき耳が聞こえないから、会話は筆談。はじめてのことだった。筆談だと、伝えたい言葉は自ずとシンプルになって、音もコミュニケーションのノイズも無くて、だんだんとこの静かな関わり合いが心地よくなっていった。手話を少し習った。美味しいとか、嬉しいとか、ありがとうとか。どういたしましての手話はなくって、なぜなら、ありがとうは言いつ放しでいいらしい、という話を聞いて感動した。

心の中から沸き起こる感情を直感的に文字にしたそれらの言葉を見つめながら、ふわふわと考えていたことがある。私は、なんでこんなにもこの街を好きになってもらおうとしてるんだろう。手話なんてまったく知らなかったのに、どんどん覚えられるのは伝えたいことがあるからか。私が長年かけて好きになったこの街、皆の人生のなかではほんの数日しか登場しないかもしれない街。別に好きになってもらっても、もらわなくても、誰にも何も影響しないことかもしれないのに。いくら考えても理由はよくわからなくて、わかるのはひとつ、押し付けがましくなってしまうそうなくらいに、私はこんなに故郷を愛していたんだということ。

後日、齋藤さんの写真を見て驚いた。私が見ていた大好きな景色、空気もそのままに写っていた。多分、この街をとっても好きになってもらえたんだと



いつだったか、十文字原の展望台から「きらきらして、宝石みたいでしょう」

もなく、ただ暖かくそこにあってくれたのだった。

て、だから私の好きも何倍にもなるのって、うまく言えないけど自然なことだ。

思った。この風景のなかに、今も大切な家族や友だちが暮らしている。東京から遊びにきた友だちも、幾度となく案内してきた。きっとおそらく、みんな少しずつこの街を愛してくれて、それがまた私に呼応して。自分ひとりの目線では、ここまで好きになれなかったかもしれない。という少し故郷に申し訳ない気もするけど、私の好きなものを、私の好きな人たちが好きになって、だから私の好きも何倍にもなるのって、うまく言えないけど自然なことだ。



青柳 文子

あおやぎ・ふみこ／1987年、大分県別府市出身。モデルとしてファッション誌を中心に活躍するほか、女優としてもドラマ、映画、舞台と幅広く活動。平行して、執筆業もこなす。2015年には、自身監修によるカルチャー誌「あお」(宝島社)を出版。

齋藤 陽道

さいとう・はるみち／1983年、東京都出身。都立石神井ろう学校卒業。写真家。主な写真集に『感動』(赤々舎)、『宝箱』(ぴあ)、『写訳春と修羅』(ナナロク社)など。2017年には、写真と言葉で綴った初のエッセイ集「それでも それでも」(ナナロク社)を発表。



明礬温泉からさらに登った海拔500mの草原地帯。大分県一の夜景スポットからの眺めは絶景。冬の寒い時期には満天の星空が広がる。
●十字原展望台／別府市大字野田字池ノツル1200 [map. 6/A-a]



と別府の夜景をみせたら、大好きな友達がこう言った。

「宝石というより、たからものだね」。

この場所に居たのだ。この場所に居たのだ。私はこの場所に居たのだった。

この先いくら別の場所で生きようと、記憶がどんなに薄れていこうとも、私がそこに存在していた時間、歩んだ道は確かにそこにあって、それは決して消えないもので、この街がある限り、何度だって立ち返ることができる。

きっと誰だってそうなのだろうけど、それだけは確かに自分だけのものであって、そういうものを「たからもの」というのだと、素直に感じた。

私のふるさととは、別府です。

別府の「B面」

ちよつといい話。

裏銀座の夜に歌う

流しのはっちゃん

【日】 本全国津々浦々、戦前戦後の歓楽街には、流しの文化が栄えていた。ギターやアコーディオンを手に呑み屋を渡り歩き、客のリクエストを受けて朗々と歌い上げる。しかし1960年代にカラオケが登場すると流しは少しずつ街から姿を消していった。

「こうやってね、弾きながら歩いてると『ちよつと寄っていいよ』なんて言われるんですよ」

ギターを抱え、竹瓦温泉周辺の裏銀座を練り歩く船乗り姿の男性がいる。彼は3代目は「ちちゃん」こと、矢野英幸さんだ。別府の街で1955年頃から活動していた「流しのはっちゃんとぶんちゃん」を継ぐ男。月に2回「路地裏散策ツアー」の参加者とともに夜の街を歩いている。

「ストリート・ミュージシャンが弾くのは伴奏でしよう。流しはメロディを弾くんです。弾きながらメロディを歌う。これがね、実は簡単なようです」

矢野さんは竹田市出身。実家がレコード屋で音楽歴は50年。メロディさえわかればなんでも弾きこなして



ボロボロになった歌詞本。昔はこれを見せでリクエストをもらうことも。今は手ぶらスタイル。



別府の大衆情報誌などではあまり触れられることがないけど、知っておけばちょっとユニークでディープな視点を持つて街を歩くことができるコラム集。別府の歴史を作ってきた老舗や文化、これからの別府を担っていく若い世代やニュースポット、などなど。そこには温泉街・別府のまた別の顔を映し出す、ちよつといい話が満載。

はお気に入りのママの店に行くと長いんだ」と茶々を入れる。この日も路地裏をサツと流したあと目当ての美人ママのもとへ。

「はっちゃん、別府音頭歌ってー」

歌うのは昭和歌謡が多いが、別府ゆかりの歌も人気が高いという。別府湯の街 ヨサコラ サイサイ 別府湯の街 湯川に湯滝 アリヤサ」その後「湯の町エレジー」や「銀座の恋の物語」を一同高らかに歌い上げた。本日の流しは、これにて終演。

Photo. 3代目はちちゃん 本名、矢野英幸さん。76歳、大分県竹田市出身。2016年に3代目に就任。現在相手のぶんちゃんアコーディオン担当を募集集中。

別府の文化歴史は 平野資料館 で学べ！



【流】 しのはっちゃん3代目デビューを後押しした「平野資料館」館長の平野芳弘さんは別府生まれ別府育ち。小さい頃から歴史ある観光都市、別府に誇りを持ってきた。そこで、県庁で働く傍ら、昭和50年代頃から、この街の資料集めをスタート。観光ポスターや、温泉で販売されていた手ぬぐいなど、時代を感じ

るローカルアイテムを見つけてはコツコツと購入してきた。こうして集めたコレクションはやがて5000点を超え、資料価値の高いものも手元に集まった。ならば観光客や地元の人たちに見てもらったらどうかと、1998年に平野資料館をオープン。自宅の一階をまるまる資料館にあてた。

「流しもそうですけど、こういう古いものの中にね、別府を再生するヒントがあるように思うんですよ」

なかでも庄巻なのが、別府観光の父、油屋熊八のコレクションだ。

「YAMAN」のステッカーが貼られた年季の入ったトランクや、初代女性バスガイドの村上アヤメさんの等身



昭和30～40年代ぐらいに別府で販売されていたという「温泉人形」。横に手ぬぐいの枠なスタイル。



petite 平野芳弘さん 66歳、大分県別府市出身。1999年10月に平野資料館を設立。「路地裏散策ツアー」の企画運営もやっている。温泉湯の名人でもある。

別府に来たら食べたい！ローカル弁当の誘惑

【別】 府駅周辺を歩きながら、町の人によく食べる弁当といえ

ば？と聞いてみたところ、駅前のデカ弁！という声がほとんどだった。地元民に愛される弁当、それがJR別府駅前の「別府デカ弁本舗」なのだ。朝は8時、夜は23時まで開いていて、どの時間帯も大勢の別府っ子で賑わっている。厨房にはとり天を揚げるための鍋がずらっと並んでおり、やっぱりいちばん人気はとり天弁当(650円)。モモ肉を使っ



別府デカ弁本舗 別府市駅前本町2-8 [map.42/D-c]



平野資料館 観光で盛り上がった別府では、観光ポスターも多数作られた。別府市元町11-7 [map.41/E-d]



若きコーヒー STAND マンは言う
「別府の昼もいいぞ！」



別 府では珍しいコーヒー STAND。ひとりて店を切り盛りする店主の小石竜徳さんは、FM 大分で DJ としても活動している。隣町の日出町で生まれ、高校を出てすぐハワイに留学。大分に戻ってきてからは、どうしたら地元を盛り上げていけるかを考えるようになったという。「この物件の大家さんと出会って、路地裏から街を活性化するって面白いなと思えたんです」



パリスタ経験を積んでいた。テイクアウトでできるコーヒーが飲める店は少ない。コーヒー STAND を作るう、そう思い立つのに、時間はかからなかった。こうして 2016 年の夏に店舗をオープン。月曜と火曜はラジオの仕事にあて、他の曜



■ Coffee Stand Stairs
別府市元町 3-6 [map.43/D-d]



ドリップ (400円)、カフェラテ (450円) など。豆は西大分の (3CEDARS COFFEE) のもの。

別府の作家を発信！
こだわりの
生活雑貨が揃う



気 の利いた生活雑貨が必ず見つかる「SPICA」。広々とした

店内には、大分名物の竹細工を使った雑貨や、日本各地で作られた生活用品が並んでいる。店内奥に行くとし、段差がつくのは、この場所がも



ともとオーナーの高野豊寛さんの祖父の表具屋だったから。建築施工の仕事をしていた高野さん自ら内装を施し、2008年にオープンした。「別府でこの形のお店っていうのはあまりなかったと思うんです。なので、地元の作家さん、移住してきた作家さんの発表の場としても使っていたできるように、地元の作品を中心に取り扱うようにしています」

アーティストが移住してくることも多いという別府。高野さんはそうした作家たちと密にやり取りをし、ギャラリーで展示をすすめている。「今は沖縄から移り住んだ連天達也



■ SPICA
別府市立田町 1-34 [map.44/D-e]

さんの作品がおすすです。木をろくろのように旋盤で回転させて削り、皿や花器をつくるんです。木の素材感が出て最高なんですよ」

アイス好きの高野さんのこだわりが詰まった「オリジナル竹製アイスブリン」(800円)は是非お土産に。

映画とともに歩んだ
別府の歴史、
ココにあり



別 府駅から竹瓦温泉へ向かって

続く歓楽街に、淫靡なボスターが風情を醸す映画館がある。「別府南映」は、昭和 20 年代に「南映劇場」として創業した映画館だ。開館当初は配給元の東宝や東映の映画を上映していたが、昭和 30 年代頃から成人映画の上映をスタート。以降、成人映画の専門館としての道を歩み、現在は駅前町から下北浜徒歩 1 分の場所に移動している。

2 代目館長の利光雄志さんは、映写室で映画を映す、父や技師たちの背中を見て育った。だから軸は成人映画というより、映写のほうにあり、自身を、活動屋。だと言っ



「ニュー南映」(右)は現在休業中。移転した「別府南映劇場」(左)のシアターには 50 席をそろえる。

いのかって思う人もいるみたいですけど、僕は邦画の短編を流している意識なんです。今はデジタルが多くなりましたけど、昔は 15 分 1 ロールの

え、利光さんの家では 3 軒の映画館と劇場を経営していたという。高度成長期、別府には 30~40 館の映画館があったそう。

「小さい頃は学校が終わるとここに帰ってくるんやけど、昔はトイレが劇場の舞台の横にしかなかったんですよ。だから、どうしても舞台の前を走って行かないといけない。僕がトットって行くと踊り子さんたちが演技をやめて、照明技師さんたちに目配せしてくれるんよね。たまにわざとバツと僕に照明が当たって、追っかけてきたりもして(笑)。恥ずかしいんやけど、今思えばおもしろいよね」

やがてフィルム時代の終わりを迎え、デジタルへと移行。映画館は次々と廃業し、今ではこちらと駅前には別府ブルーバード劇場が残るのみ。映画が観たい人は大分市まで出かけていくという。もつといえは、成人映画館は全国的にも希少な存在だ。なぜ南映は今まで続いてきたのか。

「別府から、温泉街やから、というより、家族でやっているとすることに尽きるんやないかな。経営だけやなくて、映像のことも音のことも、設備のこともわかるから。映画館で育って、全部見てきたからね」

映写するのに精一杯で、
おっぱいなんて見てらんないよ！



■ 別府南映劇場
別府市北浜 1-3-27 [map.45/E-d]



04. 50℃Kannawaの「スチドラ」

別府といえば地獄、地獄といえば地獄蒸し。そんな鉄輪ならではの文化と技術をギュッと凝縮したのが、加工食品ブランド・50℃Kannawaが作る「スチドラ」シリーズだ。スチーム&ドライ、つまり蒸して、干して、素材本来の旨味を最大限に引き出した色とりどりの野菜がスナック感覚で楽しめる。

price 右から時計回り ドライさつま芋 ¥740 / ドライミニとまと ¥740 / ドライとうがらし ¥500 / ドライ刻みちんび ¥540 / ドライフルーツミックス L ¥1,300 すべて+Tax



03. 三洋産業の「別府竹細工コーヒー ドリップスタンドセット」

別府に本社を置く三洋産業はコーヒー関連機器の総合メーカーで、その筋ではつとに知られた会社。中でも、コーヒーフィルターの製造では国内有数のシェアを誇り、その品質は折り紙つき。今回のコラボでは、大分県唯一の伝統的工芸品・別府竹細工を採用したスペシャルなドリップセットが誕生した。

price ¥10,000+Tax



05. BEPPUスパイスの「火の海タレ」

「地獄」にちなんだ激辛の万能調味料は、ラーメンから餃子、炒めものまで、幅広い料理で存在感を発揮する。別府八湯に倣い、辛さは8段階をご用意。湯の町で育った唐辛子やシタケ、荒削りした10種類のスパイス類を配合し、独特のコクとクセになる後味を実現させた。

price 各¥444+Tax



01. みょうばん湯の里の「温泉スターターキット」

国の重要無形民俗文化財に指定された製造技術で、入浴剤「薬用 湯の花」を製造するみょうばん湯の里。ブランドオリジナルのテキスタイルをあしらった巾着を、鮮やかなオレンジ色に染め上げた。手ぬぐい、全身ジェル、ミストスプレー、せっけんが付いた豪華キットは、温泉マニア垂涎!?

price ¥3,000+Tax



02. 亀家の「棒きんロング」

別府は秋葉町で50年近く営業を続ける老舗和菓子屋「亀家」で一番人気を誇るのが、長方形の細長いきんつば、通称「棒きん」だ。なんでも、鉄輪の鬼地獄の鬼が持っている金棒をイメージしてデザインされたそうだが、このユニークな形状が意外にも食べやすい。味も絶品!

price 各¥500+Tax



BEAMS EYE on BEPPU
コラボ土産が
限定発売!

2月7日からBEAMS JAPANで開催されるイベント「BEAMS EYE on BEPPU」では、別府市内で活動する作り手たちとのコラボアイテムを展開。温泉街ならではの小物から地元の絶品名産物まで、ここでしか手に入らない個性豊かな限定品がズラリ!

2018.02.07~
BEAMS EYE
on BEPPU
START!!
イベント詳細は
P.112をチェック

● 12月19日

前日が自分のバンド、シャムキャッツのイベントだったから、布団に入ったのが午前2時過ぎ。今朝は6時半起き。眠いぜ。今日から3日間、別府を旅する。一度、バンドメンバーと半日遊んだことがあるくらいで、街のことはほとんど知らない。どんな出会いが待っているのかとても楽しみだ。

11:00

空港から1時間そこらで北浜にある「別府のお宿加賀屋」[kaga-ya.com]さんに到着。荷物を置いて即ロビー集合！初日からズバっと面白スポット巡りの旅程が組まれているのだ。が、最初の目的地までは時間に余裕がある。宿のご主人の皆さんに旅程表を見せつつ相談してみた。大さんは少し鼻にかかる声で、石橋貴明を思わせる話し方。「どういう別府が知りたいのん？有名だし行ったら実際面白い」オモテの別府もあるし、ディープな『ウラの別府』も教えられるけえ。たとえば『〜』と、いきなり情報がわんさか。なんとなく、こうなるんじゃないかと思ってた。というのも、僕のおばあちゃんちは長野の上山田温泉という街にある大黒屋っつーラーメン屋で、温泉街を「作っている側の人」の感じには幼いころから親し

みがあった。大さんのちゃきちゃきして柔らかな人柄は僕には懐かしく感じられた。話すうちに「ていうか宿はなんだろうにしたん？取材ならもっといい宿あるけえ、見といたほうがいいよ！」いま電話するから行こ！車で送る！と、まさかまさかの、宿についてすぐ別の宿の見学に行くことに。急展開に戸惑いつつ、旅が始まる感じにウキウキした。車では、安室奈美恵の曲がかかった。

「すごいやろ〜」と大さん。到着したのは「山田別荘」。なるほど外観からかっこよくて品がある。日本昔ばなしみたいに、土壁に柿が干してある。女将のるみさんが迎えてくれた。ニコニコはきはきしてて、かわいらしい方。「自由に見て行ってくださいね〜」と言っていただけで、広い館内を探索。いい感じに太陽が入ってきて、さながら映画のセットみたいで見とれた。すごく素敵だった。ピシッとキメた都会的な、なんていうか大理石の床があるみたいなホテルのおもてなしじゃなくて、生活感のあるやわらかい感じ。僕も泊まってみたい！（大さんごめん）

13:00

山田別荘から歩いて10分、期間限定のカレー屋さん「TANE」へ。この旅行記が

誰かのお目に触れるころには、もうやっていないお店。それでいいのかと思うつつ、カレー大好きだし前のめりでイン。兵庫県の有機野菜を使った南インドスタイルのミールス。本格的なスパイスカレーなんだけど、野菜の味わいが日本を強く感じさせてくれて面白い！ラッサムやチキンカレーはしっかりインド。そこへ柚子で作られたアチャールや、サツマイモのポリヤル、水菜のコサンバリが

和を連れてくる。次々と違う味覚。食べるごとに理解度が増して、プレート上でぜんぶを混ぜてかっこんだとき、最高潮に美味しかった。チャイもビンビン系で二重丸。店主は京都出身で、最初は福岡でカレー屋さんをやるうと思っただけど街の大きさが別府のほうが理想的だったので、この場所にしたそう。なのになにすぐ閉めてしまうんですねえと聞くと、この場所は「PUNTO PRECOG」という名前の、

一見するとお屋敷のような佇まいの温泉宿。当初、別荘として作られた館内には、内湯と露天からなる立ち寄り湯も。国内のみならず海外からのお客さんも多数。●山田別荘／別府市北浜3-2-18 [map. 8/D-c]

残念ながら、絶品カレーが食べられる「南インドカレー TANE」はすでに営業を終えてしまった。次に「PUNTO PRECOG」に入るお店をお楽しみに。
●PUNTO PRECOG／別府市元町3-5[map. 9/D-d]



数カ月ごとにお店が変わるスペースで、一旦たたんで、2018年の頭はインドに行くとのことだった。なるほど。で、帰ってきたらまたやるそうです。お店の名前、チェックし続ければまた食べられそう。次に入るお店も楽しみ。

14:30

この旅最初のお風呂を目指し、鉄輪へ。「谷の湯」は観光客の多いメインストリートから外れた住宅街の中、川沿いにひっそりあった。あたりはお湯と湯気が噴出する「地獄」に囲まれていて、湿度が高かったこの日は、風が吹くと湯気が舞い上がって5メートル先も見えなくなるほど(後でタクシーの運転手さんに教わったことだが、晴れてカラッとしている日はあまり湯気が見えないそうだ)。昭和の庶民感と言おうか、つげ義春の漫画に出てきそうな外観。浴場も年季の入った打ちっ放しのコンクリートでこれまたかなりそそる雰囲気醸し出しているのだが、それよりもまず目に飛び込むのは仏像! 浴場に、仏像がいる。はじめまして、お邪魔しますということでお賽銭を入れた。けっこう透き通ったお湯。温度は43度くらいだろうか。ちょうどいい。入るときにすれ違った、先に入っていたおじさまがいい温度にしてくれていたのかも。そうそう、「別府の温泉は薄めるのが禁止」と聞いていたけれど、ここは蛇口

からホースが伸びていて、表札に「好きな温度に薄めてお入りください」と書いてある。仏様に見られているからなのか、泉質なのか、スーッと邪気が抜けていくような感覚。僕を別府に連れてきてくれて、ありがとうございますという気持ちかわく。しばし、無心に。水の音と、外で何やら話をしている同行のみんなの声が聞こえる。何話してんのかな。あ、無心になってない! と、坐禅でもしているかのような気持ちになったのは、やっぱり仏様がそばにいたから?

15:30

谷の湯から川沿いにカーブを降り、いでゆ坂を横切ったところにある「鉄輪豚まん本舗」で豚まんをいただく。「地獄蒸し」と言われる地面から湧き出る湯気を使って蒸したからか、ほおばるとほのかに温泉の香りと、ミネラルっぽい感じが手作りらしい、懐かしく優しい感じがあった。食べながら、いでゆ坂を上る。昔ながらのお土産屋さんや大衆演劇場。いい温泉街。そんで温泉をさらにハシゴ。「ちっちゃいし、大した風呂じゃないよ」と言いながら、町の組合長さんが「上人湯」[map.12/A-a]に案内してくれた。石畳の浴場の真ん中に、角丸の可愛い湯船がポツリ。多分、谷の湯から500メートルも離れていないお湯だけれど、入ったときの印象がまったく違った。清涼感と



いうか。ふはくつと湯を出ると「俳句思いつきました?」と聞かれてハッとした。温泉に入る前に、俳句を募集してるから浸かりながら考えてくれと言われていたのだ。すっかり忘れていた僕は「一句読むことも忘れる 気持ちよさ」と書いて投稿した。なかなかうまいこと言ったと思うけど、俳句じゃないかこれ。

17:00

「TONTONTONTUTU」[map. 13/B-b] 妙な名前だ。サザエさん一家がエンディングで飛び込む家とほぼ一緒の形をしたお店。入ると左手にバー、右手にソファア、奥は洋服や雑貨、ファミコン、漫画が並ぶサイケ・カオスゾーン。一体全体、何屋なのか。名前だけではなく、すべてが妙なのだ。貴族みtainなジャケットと帽子に、真っ赤なジャージのパンツという、かなり個性的なファッションで登場、店主・首藤さん。話し出すと、物腰柔らか。首藤さんは東京で洋服を学び、お店を出すタイミングで別府に戻ってきたそう。自ら「片足をドブにつっこんだファッション」と銘打っているだけあって、売られている服は気持ちよくズレを感じるけれど、不思議と嫌みがない。僕はテンションが上がったのでチェックのパンツを購入。

18:00

「別府でヤバイものに会えたかったら



地元民に愛される共同浴場。隣接する民家の窓に設置されたホースに入浴料150円を投入してイン。●鉄輪温泉 谷の湯／別府市北中1-8 [map. 10/B-a]

あそこがいい」と首藤さんもオススメしてくれた「書肆ゲンシシャ」[map. 2/B-a] へ向かう。大きなマンションの1階にひっそりと佇む小さなドアを入ると、そこには外観からは想像もできない世界が待っていた。ゲンシシャは、1時間300円で読書とお茶を楽しめる書店であり、博物陳列室。稀覯本、漫画、写真集、アート本などを購入したり店内で読むことができる。「どういったものをご覧になりたいですか?」と、店主の藤井さんがニコニコと（いや、ニヤニヤといったほうが正しいかもしれない）、矢継ぎ早に差し出すそれらは死後写真、女性同士のスパンキング写真集、関東大震災当時の死体を写した絵葉書などなど、どれも普段滅多にお目にかかれないものばかり。

「こちらは100年前の恋人たちの写真なんです、何が珍しいかお分かりですか?」

一見普通の仲睦まじい写真なのだが、なんとこれ、LGBTの恋人写真であるという。今よりずっと同性愛が理解されなかった時代に、恋人たちはそれでも写真をひっそりと残していた。泣けた。

19:00

別府駅の北側に位置する北高架商店街へ。目的はレコード屋や「ReNRec」。店主は日名子さん。僕はバンドで去年中国をツアーした経験を話した。「北京には



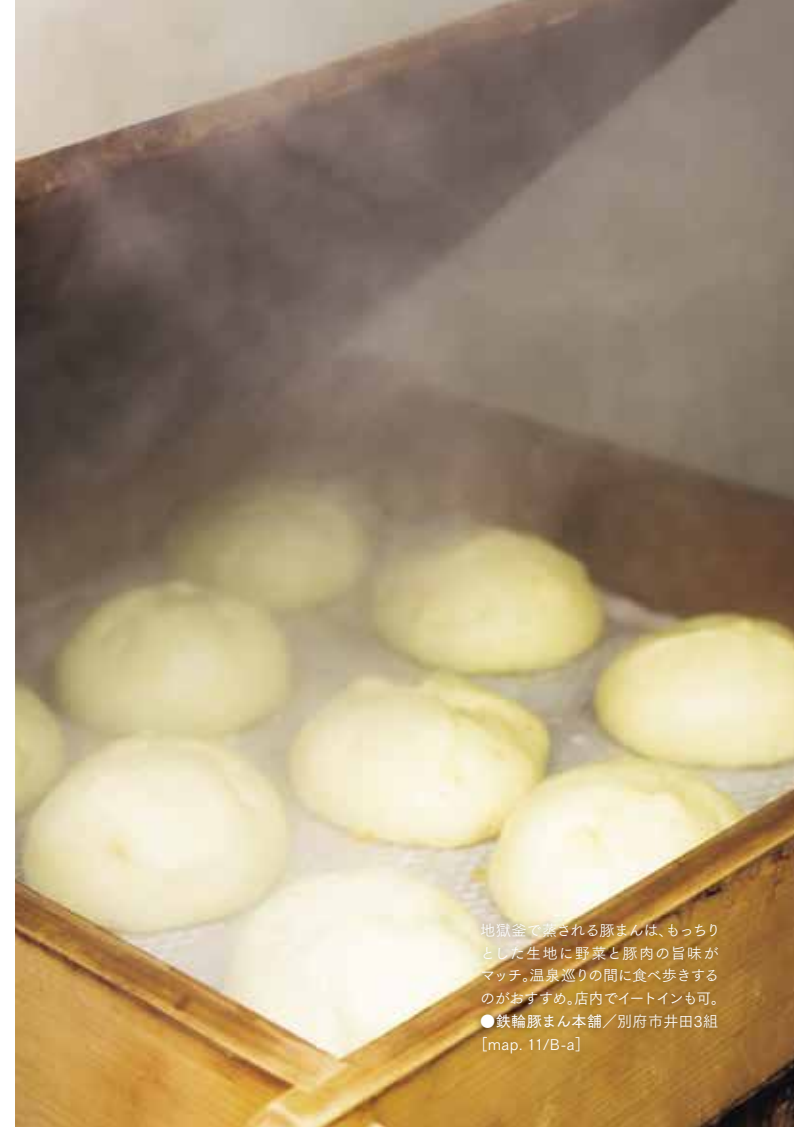


15年続いているシューゲイザーやノイズのレーベルがあって、いまだに人気みたいでしたよ。一周して僕の耳にも新しく聴こえるなあと思ってたところでした」「なるほど、そうなんだよね、音楽は流りやかっこいいと言われるものが戻ってくるものなんだ。ちょうど今ダンスミュージックの世界ではミクスチャーでアブストラクトなものがまた流行りでした。2000年代初期に流行ってたような音がまた新しく聴こえる時代が来たんだ」「そういうのはロックにも当てはまりますね〜(長くなるので省略)」なんて、話が止まない。こういうのが、一番楽し

い。去年からハマっているハウスやテクノの棚から気になる盤を視聴させてもらった。最高なのが、店内のかいスピーカーから爆音で聴かせてくれること。いつまでも聞ける。気に入ったのを4枚と、「2002年のテクノのことを考えると切なくなる」という日名子さんによる最高の手書きポップに心惹かれて試聴せず1枚選んで、購入。大満足。

20:00

バンドを続けてもうすぐ10年の僕だけど、「箱バン」を見たことは、ほとんどない。箱バンというのは「ライブハウスお



地獄釜で蒸される豚まんは、もっちりとした生地に野菜と豚肉の旨味がマッチ。温泉巡りの間に食べ歩きするのがおすすめ。店内でイートインも可。
●鉄輪豚まん本舗／別府市井田3組
[map. 11/B-a]



ジャンルを横断した多種多様なレコードが並ぶ。「誰が来ても楽しめるように」とは店主の日名子さん。●ReNTRC。／別府市駅前本町9-20 [map.15/D-c]



付きのバンド」という意味。毎晩何度もステージに立って、訪れたお客さんを楽しませる。僕らがやっているバンドのスタイルとはだいぶ違う。「別府ヒットパレードクラブ」は、歴史あるオールディーズライブハウスで、そんな「箱パン」の素晴らしさ、ロックンロールの素晴らしさを堪能できる。いやー本当に最高に楽しかった。おそらくAPU（立命館アジア太平洋大学）の留学生たちだろう。忘年会かな、20人くらいのグループ。初めは大人しくお酒を飲み交わしているだけだったけど、ショーが盛り上がるにつれ1人、2人、ぎこちなく踊り出す。女の

子同士で手を取って、くるくる回ったりして。それに応えようとバンドの演奏もテンションが上がっていく。「伝統芸」といってもいいだろう、リーゼントでキメたボーカルが振り付きで歌う「サマータイムブルース」。ものすごくカッコいい。グイグイ盛り上がる。クライマックスを迎えるころには1人残らず席を飛び出して、笑顔で跳ねてた。いろんな人種の若い子たちが「監獄ロック」や「ジョニービーグッド」でもみくちゃになっている光景、すごいグッと来た。もちろん僕もたまらずステージ前に飛び出して踊った。踊ることは人生で一番楽しいことだ。





「ヒッパレ」の愛称で親しまれるクラブ。一度は火事で全焼したものの、多くのファンの協力によって火災から3日後には営業再開。昨年9月より現在の場所に。食べ放題・飲み放題で女性3,000円、男性3,600円。●別府ヒットパレードクラブ／別府市北浜2-1-2 [map. 16/D-c]

● 12月20日

6:00

ものすごくいい目覚め。前日の疲れは加賀屋のお風呂でぶっ飛んだみたい。大さんとおみさん(山田別荘の女将)に勧められた、明礬温泉は「岡本屋」さんの地獄蒸したまごサンドを目指して車を走らせる。味の濃い玉子がたっぷり。周りからの硫黄臭も相まって、まだ温泉に入っていないのに口と鼻が極楽飽和状態になる。そこに流し込むコーヒー。サッと現実に戻してくれる感じ。「リセットおいし」というジャンル。新しい朝食体験。

10:00

満腹の体を乗せて、車は側道へ入って山を上る。グイグイ上って行き止まりになったところ、なんともいい景色。こちら辺は放牧のために山が拓かれていて見晴らしがいいと、昨日タクシーの運転手さんが言っていた場所だ。「白い雲のように」のPVが撮れそうなロケーション。撮影の清水さんがテンション上がってばんばんシャッターを切っていた。すごいですね〜きれいですね〜なんて言いながら原っぱを見渡していると、下のほうに裸のおじさま方を発見。次なる目的地「鶴の湯」[map.18/A-a]だ。ひょんなことから道に迷っていたことが発覚。気を取り直して墓地を目指す。そう、鶴の湯は山中の

原っぱにポツンと湧いているワイルドでざっくりした温泉、いわゆる「秘湯」なのだけど、そのアプローチも独特で、なんと霊園を登った先にある。一瞬本当にこの先に温泉があるんだろうかと不安になるくらい、登る。掘って建て小屋の脱衣所がかっこいい。上から見たおじさまたちはちょうど温泉から上がったところだった。「東京から来たの？仕事？いいねえ、仕事で温泉だなんて」「そうなんですよ。でもおじさんはお屋から温泉だなんていいじゃないすか、これから仕事ですか?」「いや、今日は打ち合わせしたらすることない。ガハハ」「いいですねー」「今温度ちようどいいし、ゆっくりしていいよ」。自然に囲まれた中で裸になる。それだけで超気持ちいい。「秘湯」というと道無き道を分け入って木々の間に……なんてのを想像しがちだけどここはもう、抜けが半端じゃない。ドーンと原っぱ。後ろには山。俺、裸。温泉、あったかそう。入る。えええええええええ、すごい熱い!! おじさん、おじさああああん!! 熱いじゃあああああんん!! 温度計みたら46度あった。しかし慣れるとだんだん気持ちよくなってくる。余裕が出てきて周りを眺められるようになると、もう最高。ほんとに超最高。「空も山も風も木も草も水も、みんな俺」みたいな感覚。



11:30

駅へ戻ってお土産を買いに「SELECT BEPPU」へ。名前のごとく別府にまつわるものが置いてあるセレクトショップ。お店の方、すごく親切に商品について教えてくれた。でも一番印象的だったのは「鶴の湯」の話。カッコ内は僕の気持ち。「鶴の湯行かれたんですね！ 私も行きました。おじさんと、おばさんと友だちで行ったんですけど(え、若い女の子なのにおじさんと混浴の秘湯へ行ったのか)、すごく星が綺麗で、夜行くのがオススメです！(夜にあの霊園を抜けて

行くの怖いな)でも、私行ったときイノシシが出たんです、注意してください！(しようないですね)イノシシが出たときは体を大きく見せると逃げるので、両手を広げて大きな声を出すのがいいそうです(裸でそれやるのハードル高いな〜)。ここでは、豊泉堂の鳩笛を購入。大分県の郷土玩具である土人形。吹くと喉のつまり除けになるらしいので、ライブ前のおまじないに使おうと思います。

12:00

そのすぐ裏手の「喫茶ムムム」。お店に



地獄蒸しプリンが有名だが、イチオンは「地獄蒸したまごサンドイッチ」(¥500)。●明善温泉 岡本屋売店／別府市明善3組 [map. 17/A-a]



コーヒーに加え、ご主人の地元食材を使った食事メニューも充実。●喫茶ムムム／別府市中央町1-27 [map. 20/D-d]

入るとカウンターにゲンシシャ店主の藤井さんが！ よくいらっしやるらしい。ちょっと喋った。今はなくなってしまう秘宝館のことをちょっと聞いた。1日目から各所で付いて回った秘宝館の話題、旅の裏テーマになりつつあったがここですべての謎が解けた。ちなみにゲンシシャに飾られている、実は僕も気になっていたが突っ込まなかったライオンが交尾している写真は秘宝館から買ったものだそう。

さて、ムムム。店主の廣瀬さんはスイートコーンが特産の竹田市出身で僕と同じ年(このことを聞く流れでゲンシシャ藤井さんは僕らの年下であることが判明して、僕は顎が外れた)。大学時代に出会った奥さんの真美さんは大阪出身。3年前に2人で別府へ移住してこのお店を開いた。築40年のもともと喫茶店だった物件。いいところはそのまま使い、あとは2人のセンスでアレンジ。確かに、純喫茶と今時のかっこいいカフェのどっちの雰囲気もある面白い空間。コーヒーすんごく美味しかった。口当たりはマットで、香ばしい感じ。じわじわ苦味と甘味が舌に染み渡るのを感じていると、鼻ヘシツクな香りが抜けていく。サードウェーブっぽい淹れ方、「エアプレス」という手法を用いながら、前のお店からのお客さんであるおじいちゃんやおばあちゃんにも楽しんでもらうために、酸味やフルー

ティーな味わいではなく「喫茶店らしい」コーヒーに仕上げているとのことだった。なるほどー。なんとなく僕はMicoが聴きたくなった。もくもくと作業する廣瀬さんと、大阪の人っぽいトークで楽しませてくれる真美さんのコントラストにほっこり。ガトーショコラもナポリタンも超美味しい。お店を開くまで飲食店経験がなかったというから驚き。多分嘘だと思う。そのくらい美味しい。

1300

ムムムから歩いて3分、ベトナム料理屋さん「COM DIA」がある。8畳くらいの2階建て、小さな可愛い建物からまんなるの優しいお顔をしたトウイさんが元気に出迎えてくれた。2階はベトナムの子供部屋みたいな空間。ベトナム↓別府。「どうして？」と誰もが思うところ。トウイさん曰く「縁ですわー」。「回り回って、行き着いた感じ」と、めっちゃ流暢！ お店の名前のCOM DIAとは「ご飯プレート」って意味で、お店のウリもそれ。日本というと定食みたいな感じ。ただ、今日はご飯がもうなくなっちゃったってことで、僕は牛肉のフォーと里芋とイワシの包み焼きを食べた。フォー、ちょー好きな味だった。毎日食べれるやつ。レモン絞って、唐辛子ちょっと入れる。さっぱりスープは全部飲み干した。旅してるとつつい強いめのご飯を食べがちのとき

別府でしか手に入らない土産を買うなら、築100年の長屋を改装し作られたセレクトショップへ。建物の二階では、アーティスト、マイケル・リンによる模絵アートも観覧できる。
●SELECT BEPPU / 別府市中央町9-33 [map. 19/D-d]

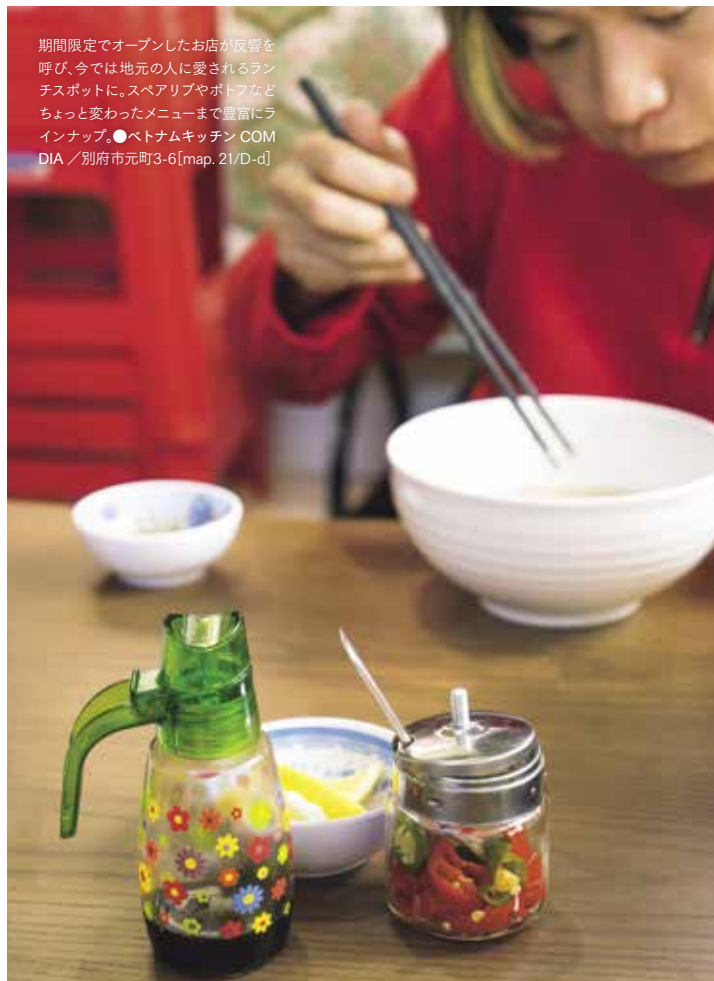


ろへ、この優しさ。染みた。里芋とイワシの包み焼きは、ベトナム料理らしからぬ、ちょっとしたいいこのフレンチみたいな盛り付けで登場。付け合わせもたっぷり。トウイさんの人柄が出る気がした。

14:00

海沿いに車を南へ走らせ「高崎山自然動物園」へ向かう。別府の街中から大分市側を見たとき、海へせり出すこの山がずっと気になっていたのだ。調べるとサル山らしいことが分かったので行ってみる。ちいさなモノレールに乗ってお猿さ

んたちのところまで上る。乗り場のそばでなぜか犬が飼われていた。「犬猿の仲」と言うけれどもうまくやっているのか。「サル山って言ってもそんなにいっぱいはいないでしょ」なんて言いながらやってきたのだけど、終着駅に着くころには辺り一面お猿さん。完全に人間アウェイの環境にテンションが上がる。飼育員さんの説明でボスザルを把握。「一般的にボスザルはモテないと言われるんですけど、このボスはモテるんですね」。さすが、態度もちんこもでかい。「今日は端っこにいますけどね、あれは好きなメ



期間限定でオープンしたお店が反響を呼び、今では地元の人に愛されるランチスポットに。スベアリブやポトフなどちょっと変わったメニューまで豊富にラインナップ。●ベトナムキッチン COM DIA / 別府市元町3-6[map. 21/D-d]



スがあっちにいるからなんです」。素直やん。イモやりの時間になるとお猿さんたちはそれが分かって一斉に叫びだす。キーキーキーものすごいサラウンド。初めて体験する音。先ほどの方とは別の、ガタイのいい若手飼育員さんが台車を引きながら突っ走りイモをばら撒いていく。そのあとを追って洪水のようにお猿さんたちがなだれ込む。ものすごい迫力。俺までひっ捕らわれて飲み込まれそうだった。イモを取るのが得意なお猿さんもいれば、そうじゃないのもいた。1匹で3つ取れるやつ、取れなくてほかのお猿さんから奪おうとしてるやつ、いろいろ。その中に2つイモを抱えて変な歩き方をしているお猿さんがいた。「さやか」という名前のメス。生まれつき前足が不自由。山で暮らすお猿さんにとってはかなりのハンデ。それでも彼女は健気にたくましく大人になって、これまで3匹の子猿を育て上げた。うん、俺もがんばるって気持ちになった。帰りのモノレールから見える夕暮れの海がとても綺麗だった。

19:00

せっかく別府に来たんだし、やっぱり関あじ関さば食べたい！というわけで晩飯は昨日のみに教えてもらったお店へ。「混んじやうと面倒だからね、取材は受けないことにしてるんだあ、ごめん

ねえ」と優しく断られちゃったからここには載せられないんだけど、出てくるもの全てが美味しかった！中でも感動レベルだったのは「琉球」と呼ばれる大分の郷土料理。ブリやさばを、ゴマ、しそ、生姜とかの薬味と一緒に甘めの「漬け」にしたもの。けっこう強めの味付けだけど魚の味も全然負けない濃さだから旨味のパンチがヘビー級。ボディーにズシン。かぼすを絞った焼酎水割りをガツと入れればもう天国行ける。聞くとところによると別府にはちよいちよい「取材はいわく」というお店があるそう。それってお客さんに愛されてるってことでちよー素敵だし、街に入ってからじゃないと知れないことがあるってのも、いい。やっぱネット使うより現地の人言うことのほうが圧倒的に正解だ。

20:00

うまいうまい言いながらだいぶ飲んだので、なんかちょっとゲーセンとかで酔い冷ましたいなうと思ってたところにピリヤードバーを発見！温泉街でピリヤード、いいじゃないじゃん。入ると猫を抱いたマスター、利光さんがカウンターからこんにちは。テーブルにも猫。椅子にも猫。全部で4匹。みんな人懐こい。おでこをすねに擦り付けてくる。発情期のトム。なおなお甘えてお腹を見せてくる。食べちゃうぞ。外にもう1匹。



彼はテツくんという野良猫。羨ましそうにこっちを見てるけど中には入れてもらえない。寒いだろう。ごめんじゃ。ビリヤード場なのにカウンターのトイメンが映画館のチケットカウンターになっている。不思議な造りのバーだなあと思ってる。不思議な造りのバーだなあと思ってる。不思議な造りのバーだなあと思ってる。隣接する成人映画館「別府南映劇場」のオーナー兼映写技師でもあった。「ニュー南映」の2代目オーナーとして後を継ぎ、バー経営もしていた利光さん。バイトを雇ってバーを任せてもお客さんにビリ

ヤードを教えられるのは自分だけだし、映写技術を人に教えるのにも時間がかかるってことで2つを合体！ 映画館を移転！ 今はバーのマスターとチケットもぎりと映写を全部1人でやってるという。すごい！ かわいいーと思わず言ってしまった。1ゲームたっぷり楽しんで（下手だからすごい時間かった）。外に出ると野良猫テツくんがご飯を食べていた。中には入れてもらえないけど、ご飯もらってるんだな。利光さん、本当にかっこいいなあって思った。





昭和61年から続く砂風呂。お湯とは一味違う温泉体験をした後は、海を眺めながら上人ヶ浜公園を散歩するのが最高に気持ちいい。●別府海浜砂湯／別府市上人ヶ浜 [map. 22/B-a]

別府には砂風呂、蒸湯、泥湯と3つの変わった温泉がある。2日間別府を旅しながらどれがおススメなのか聞いて回っても、人によっておススメは違う。別府育ちの青柳ちゃんにメールすると「全部違うから全部愛してる」と返信が。朝一番、「別府海浜砂湯」へ。この日僕に砂をかけてくれたのは別府唯一の砂かけマイスターのももやまさん。マイスターになるには最低3年の砂かけ経験と試験で合格が必要。ザッザッと小気味よく、あっ

たかい砂が盛られていく。温泉からの蒸気を含んだ砂は思いのほか重たい。熱さは掘る砂の深さとかける砂の厚さで調節するそう。勘と経験が頼り。肩から足の裏まで、ぎっしり砂に包まれて、見た目は顔だけ出てるツタンカーメン。体の感覚は、漬け物になった気分。悪いエキ스가砂の重みで抜けていくうゝ温泉の蒸気が体に入ってくるうゝ浸透圧うゝっていう感じ。じとゝと汗がでる。体の芯がダイレクトに熱せられていく感覚。閉じた臉が赤く映ってる。俺は砂の中にいる。

● 12月21日

9:00



自転している地球にひつついている俺……。15分くらい経ったころ、宇宙が見えた。イキかけた。さすがマイスター。すぐかったす。砂から出た瞬間「あ、俺生き返った」と思った。「人間の世界に戻ってきてしまった」って感じがした。砂を落とすのにシャワーを浴びて温泉に浸かる。これがまた、最高でした。

10:30

お風呂連チャン！ 続いては硫黄泉で有名な明礬の中でも一番の濃度を誇ると言う「旅館若杉」へ。別館にあるお風呂に案内してもらう。玄関を入っただけで硫黄臭がムツと強くなる。浴室はもっと鼻をつく強烈な硫黄臭!!そして、今日まで見てきた別府のお風呂の中でもずば抜けて白濁したお湯!!湯船や床の石も結晶で真っ白!!「滑りやすいんで一回掃除したんですけど、この雰囲気がいって言うお客さんが多いので白いままにしてるんです」と、2代目の渡辺さん。確かに。雰囲気最高。ぬおおお。ルパンのように一瞬で脱衣そして入泉。「タプン」って聞こえた気がした。熱くもなくぬるくもないイチパンいい温度。足の指先での探り、一切いらぬ。するっと体がお湯に吸い込まれる。とろっとろのすべっすべ。顎まで浸かって、目を瞑る。めちゃくちゃ気持ちいい。チロチロ水の音。外の道路の音。うん。目を開ける。お屋の

日差しがほの明るい。壁の岩、変色して黄色い。ふわふわ幻想的。温泉に浸かって「やばい」と思ったのはこれが初めて!上がってもしばらくばっかばか。そして、硫黄の匂いがついたままだった。

12:00

屋ご飯を食べに「スパイス食堂 クーポノス」へ。なんとなく聞いたことある名前だなと思っていたら、店員の園ちゃんは去年バンドのツアーで大分に来たときにフー

ドを出してくれていて顔見知りだった。彼女は別府のキーパーソンの1人。学生時代に別府の街づくりの研究をしたことをきっかけに移住して、これまでこの街のアートプロジェクトとか、昨日行った、SELECT BEDDの立ち上げとか、いろんなことに関わってきた。3年やったら別のことを始めるといふポリシーで、今はここクーポノスで料理をやってる。ただ、野菜切るのも疲れたからそろそろここからいなくなるって。というのは半分冗談で、3年やってみて手作りのケータリングがこの街でどれくらいできるのかってこともだいたい掴めたし、自分の料理の腕も上がったから、一旦違うことをしようと思ってるらしい。店内のお神札の上の天井に「雲」と書かれた紙が貼られていた。園ちゃんが行っている気功教室で貰ったもので、2階のあるお家だと神様を踏んづけることになっちゃうから





「この上は雲なんですよ〜」ということにするために雲と書いて貼るんだそう。その気功教室の先生がやってるお店を紹介してもらって、お店を後にした。

13:00

別府駅市場の入り口近くに赤い屋根の一軒家がある。そこが「LIGHT・GATE」。女性専用のヒーリングサロンだけど園ちゃんの紹介ってことで、快く迎え入れてくれた。「気」ってなんだろう、なんとなくわかるし、全然わからない。主宰の山本さんの説明を受けたけど、なかなか僕の言葉では変換しづらいから、感想を

素直に書こうと思う。まず驚いたのは直接触れていないのに腰の不調を指摘されたこと。もうひとつは、やることがいっぱいあって頭が整理できてないこと。実はレベル運営で大変なことがいっぱいあって、別府旅行中もそのことが頭をもたげていたのだ。考えることが多いと気も頭のほうに溜まりがちになり、全身のバランスが悪くなるという。「足元のほうへ気をおろしていきますね〜」と言われた次の瞬間、ずん！と手の指先や足の裏に重みを感じた。あ、気が下がってきただけ少し曇っているので開くように働き

チキンのフォーやカレー、ガバオライスなど、野菜をふんだんに使ったヘルシーなメニューは、スパイシーながらもどこか優しい味。●スパイス食堂
クーポノス／別府市千代町11-25
[map. 24/D-e]





「地獄」から直に湧き上がる温泉は粒子が細かく、毛穴に入り込むので上がったあとも暖かさが続くのが特徴。入浴料は家族湯1,500円（2名/60分）。宿泊客優先●明礬温泉旅館若杉／別府市明礬1組 [map. 23/A-a]

夏目知幸

なつめ・ともゆき／1985年、千葉県出身。4人組ロックバンド「SIAMESE CATS」のボーカル&ギター。2015年に自主レーベル「TETRA RECORDS」を立ち上げ、2017年に4枚目となるフルアルバム「Friends Again」を発表。平行して、ソロ作品も精力的に発表する。

清水はるみ

しみず・はるみ／1989年、大阪府出身。写真家。主な個展に「水の骨」(Place M)、「Icedland」(Place M)、「OPEN FRUIT IS GOD」(gallery blanka)、グループ展に「LUMIX MEETS BEYOND 2020 by Japanese photographers #4」など。

かけました」と言われた。「だ、第四のチャクラって、なんですか?」「ハートですね」「ハ、ハート?」「うんと、つまり愛の部分です、言い方は難しいんですけど、もっとわがままになっていいってことでもありますよ」「愛かあゝ」。最後に、「夏目さんの場合、仕事も全部遊びと思ってやっていいと思いますよ。多分クオリティも質も変わらないので」という金言を頂戴しました。赤いお家を後にする頃にはすっかり気持ちが晴れやかに。もうすぐ旅が終わる。ちょっと寂しくなってきた。

16:00
加賀屋で大さんに挨拶。「どうもお世話になりました!またすぐ来たいです。正直帰りたくないっす。あと、加賀屋自慢の琉球丼が食べられなかったんで、今度来るときはこちらでかならずごはん食べたいです!」。これまでの感じだと、なんでも面白おかしく返してくれる大さんだったのに、「そう言ってくれるなんて、本当によかった。別府好きになってくれたんだねえ、またいつでも帰ってきてください!」とか言っちゃって妙にしおらしい。やめてよ、寂しくなるから!



長生きの秘訣は？
言わずもがな、
温泉です！



名 人。それは市内にある88の温泉に入湯するともらえる、別府市における爵位のようなもの。名人になるには参加型イベント「別府八湯温泉道」に参加し、専用パスポートならぬ、スパポート。に88湯のスタンプを押す必要がある（認定状と漆黒の認定タオルも授けられる）。

「私は奥女ようばん山荘が好き。入ると3日硫黄の匂いが取れないのよ」

そう話すのは、名人が集う「NPO 法人別府八湯温泉道名人会」の加藤厚子さん（写真右）。隣にいるのは孫

ではなく、別の名人の娘、茉那ちゃん。母と巡り、生後5カ月で名人になった。

そのお隣は、88湯めぐりを1000回繰り返した猛者、さっしー。こと指原勇さん（写真左）。指原さんが好きな湯は？

「おにやまホテルの空の湯だね。好きなところに入ってくださいって嬉しいこと言ってくれるんだよ」

早速、クーポン付ガイドブック「別府八湯温泉本（500円）」を買って、別府の温泉へ繰り出そう！



そ の理容店には、つげ義春が、諸星大二郎が、とにかくマニアックな世界が広がっていた。壁一面を埋め尽くす、大迫力のお面の数々。発泡スチロールや流木を巧みに使った独創的な顔が、大から小までずらり。ぐぐっと力強くこちらを見つめてくる。

とはいえ店主の酒井寅義さんは理容師だ。なぜお面を？ もともと美術にまつわる素養があったのだから。

「そんなもん、ないない。ボケ防止や。最初のうちは拾った船の甲板を削って、文字を彫った。でも置き場がないけん、面にした。テレビで能面を見てな、ええなあ、かつこええ

なあと思うたん」

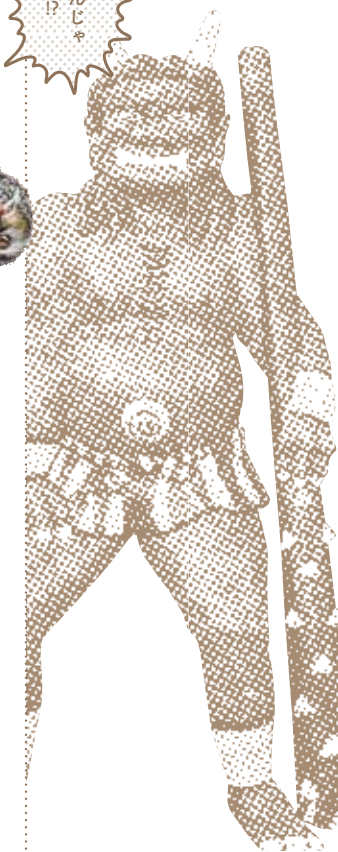
大きな声できつぱりと話す酒井さんは、一見頑固なようだけれど、聞くと優しく丁寧に教えてくれる。ボケ防止、とは言うものの、彫り始めたのはおよそ40年前だというから、40代から制作を始めたことになる。もはやベテラン彫刻家だ。闇雲に彫



面以外に女天など模した「像」も多数。ボディが「ストロングゼロ」の一風変わった立体物も。

壁一面のお面！
驚愕の理容店、
その正体は？

なへんじや
こりゃ!?



上：鶏肉に食らいつく瞬間。下：飼育員オーリスターズ。左から外山なつきさん、菅原浩樹さん、園田啓介さん、田中晋秀さん。

温 泉とワニ。初めてこの組み合わせを見た人はエッ？ と思うかもしれないが、そもそもワニは熱帯から亜熱帯にかけて生息する生き物。すなわち、温泉の地熱を利用した飼育が可能なのだ。

日本で初めてワニ繁殖に成功した「鬼山地獄」の起源は正統時代に遡る。大正11年、創業者の宇都宮則綱が観光のためにワニ20匹を迎え入れ、鬼山地獄を設立。以降、ワニカ

ワニの地獄は
ワニにとつての
天国？

「以前は水温が低く、冬場の餌やりでワニたちがジャンプすることはなかった。ワニは変温動物で体温調節ができないからね。温泉と蒸気を調整して水温を上げたら活動的になって飛び跳ねるようになったんです」

お腹を空かせるワニが鶏肉にかぶりつく様は大迫力。夏に比べれば、やや静かだった冬の鬼山も、すつか



■ 鬼山地獄
迫力満点の餌やりは毎週水、土、日に開催。別府市鉄輪625 [map.46/A-a]

赤ちゃんワニも誕生したことだし、
ますます賑やかになりそうです！



餌に群がるワニ。蒸気で温めているとはいえ、冬場は外気とともに水温も下がる。温度20度を切るとワニが死ぬおそれがあるため、飼育員が持ち回りで、連日22時、1時、4時に見回りを行っている。



遊郭ファンなら訪れたい路地。旅館自体取り壊され民家やアパートになっていることも多いが、わずかに丸窓やタイル壁などのカフェー建築が残る。

激安&風情がマニアに人気！

別府北部

旅館街 ってなんだ？

北 部旅館街は、行合町遊郭が移転して栄えた温泉街。かつては30軒以上の置屋が並んだ色街だったが、昭和30年代に赤線が廃止になると軒並み旅館に転業し、営業を続けてきた。しかし建物の老朽化も相次ぎ、今では3軒を残してほとんどが廃業してしまっただ。

そのなかの1軒でもある「旅館ちとせ」は、見た目こそ年季を感じさせるものの、数年前にリフォームを施したおかげで館内はとても綺麗だ。何より風呂が素晴らしい。24時間いつでも入れる自家源泉を持ち、泉質は重碳酸土類泉。浴槽の形がいびつなのは、こんこんと湧き出す源泉の成分が湯石となったから。熱さも泉質も、マニアも唸る名湯なのだ。



周りの人に迷惑さえかけなければ、自由に過ごしてもらってるのよ

「ウチは長期で借りる人もすく多いの。洗濯物も、カゴと出しておいてくれたら私が洗って、豊んで部屋まで持っていくしね。門限もないし、台所も自由に使っている。周りの人に迷惑さえかけなければ、自由に過ごしてもらってるよ」

女将の須田真弓さんはそう話す。長期滞在者は県外の人が多いらしく、須田さんは「静かに一人で過ごしたいんだらうな」と、一切干渉はしないという。湯治場として、多くの人々を受け入れ、癒やしてきた風土が感じられた。

それ以来「ちとせ」の歴史は少し変わっている。この旅館を立ち上げた通称「おばちゃん、こと石井清恵さんは、若い頃からたぐさんのス」

気軽に泊まりに来てよね

旅館ちとせ

素泊まりは2,500円。テレビ、エアコン、トイレ、冷蔵庫つき。別府市駅前本町8 [map.48/D-c]

東京↓別府

コースも絶品！

ワインバー

フ アッションと食って似てるんです。素材、色、感触、流行、どちらも、そのバランスだと思っから」

10年前まで東京でアパレルの仕事をしてきた橋本亜子さんは、予約が入ったときだけ、夫であり店主の橋本司さんの店、竹瓦温泉の「Pure Wine Bar Enfer」で腕ふるう。作るのは、大分の食材をふんだんに使ったオーガニックのコース料理だ。「ソムリエはDJみたいなもの。その日の気分を伝えてくれたら、ぴったりのワインを選びますよ」

80年代にイベントマンだった司さんは、2000年頃からワインを学び、東京・駒沢で開店。震災を機に別府に移り、亜子さんと出会った。



■ Pure Wine Bar Enfer
亜子さんの料理は要予約。ゴボウとナッツの塩きんぴらや、銀杏の茶巾がのった「前菜プレート」と「七草がゆ風リゾット」。ワインは1杯1,000〜2,000円台。別府市元町15-5 [map.49/E-d]



異業種から食の道へ飛び込んだ2人の、経験に裏打ちされたセンスたるや。ちなみに亜子さんは、司さんのトークにも大鼓判を押す。「あんなに濃いバブル時代を過ごした人、いないと思います。ぜひ話を振ってみてください(笑)」

謎多き定食屋の正体とは

石

垣西の見晴らしのいい通り沿いにある、カウンターのみのとんかつ店とんかつ山本ローズ。ここはかつて「山田チキンカレー」という人気のカレー店で、

のちメニューをリニューアルして「山田ホテル」というカレー店になり、今



テーブルにはソースのほかに食卓塩もあるの、お好みで好きなアレンジを。ごはんは大盛無料。



改めてとんかつ店になったという不思議な店だ。細長いカウンターは顔が向かい合っているが、店の二面がガラス戸のため、光が入り圧迫感はない。整頓され、無駄なものがない。つとない店内からは、店主の食への向き合い方がにじみ出ている。メニューは鹿児島豚肉、霧島熟成ひなもりポークを使った、ローズ1,100円、味噌ローズ1,200円、上ロース1,300円、リブローズ1,500円と、一本単位で注文できる海老フライ(300円)。上ロースと海老フライを注文したところ、こ

■ とんかつ山本ローズ
アルミサッシに暖簾が目印。平日のお昼時は混雑必至。別府市石垣西9-5-11 [map.50/B-b]



ナックを経営してきた女性経営者だった。いつか旅館を営みたいという夢があったおばちゃんは、今から60年ほど前に旅館を買い取り、営業を始めた。

「おばちゃんももう、ものすごく面倒見のいい人だった。誰彼構わずお世話をしてくれ。人望も厚くて。私も昔からすくお世話になっていて、実の娘みたいにしてくれたんよ」

体調を崩したおばちゃんの面倒を見、南部の実家からやって来た須田さんは「絶対に店だけは続けてほしい」というおばちゃんの口癖が忘

別府地獄 極楽酩酊

文 戌井昭人

写真 田附 勝



別府湯けむり

魅惑のネオン図鑑

今宵はどこへ？迷ったら、スナック前
できらめく看板を眺めてインスピレ
ーション！竹瓦温泉周辺で採取しました。

フェリーで

12月中旬、写真家の田附勝さんと大分県の別府へ行くことになりました。われわれは、おっさんやさぐれ旅の担当のため、飛行機で別府に上陸しても味気がないということで、船で別府に上陸することになり、四国まで行って、そこからフェリーに乗ることにしたのです。

出発当日、朝7時過ぎに羽田から松山へ飛びたち、寝る間もなく松山空港に着陸。そこからバスに乗って、鉄道の松山駅へ向かいます。

四国から別府に渡るフェリーは八幡浜港から出ているので、まずは松山駅から電車に乗ることにします。時刻表を調べると、30分後に出発の電車があり、それまで喫茶タイム、滞在時間は短いけれど、せっかく松山に來たのだから、街で古くから営業していて、お婆さんが煮詰まったコーヒーを出してくれるような喫茶店を探したのですが、すぐには見つからず、駅に併設されている店に入りました。そこは、お婆さんではなくて、ステラさんという洋風な名前のお婆様が、ご自慢の美味しいクッキーを出してくれるところでした。

宇和島行きの予讃線に乗り込み、居眠りをこいていたら、1時間弱で八幡浜に到着。駅から港までは、少し距離があったのですが、どうせなら街の雰囲気味わいながら行くということで、歩いて港へ向かいます。暮れも押し迫った平日の昼間、荷物を抱えて、ウロウロ、キョロキョロしているわれわれは、大勢の地元の中学生たちとすれ違い、「なにやってんだ？ あのおっさんたちは」と、彼らに思われていたことでしょう。

そろそろ昼時で、お腹も空いてきたので、飯屋を探してみたものの、アーケード商店街は人気がなく、シャッターも閉まっている店が多くて、どうにも寂しい気持ちになってきたので、街をそそくさと抜け、港に向かうことにしました。

それにしても、ここは八幡浜、実はわたしちょっと興奮していたのです。

愛媛の八幡浜から出港している宇和島運輸フェリーに乗って、いざ、別府に上陸。運賃は2等3,100円から。写真右に見えるのは、大阪と別府観光港間を運航するフェリーさんふらわあ。

八幡浜は、森進一の名曲「港町ブルース」の歌詞に出てくる港町で、これまでの人生でわたしは、港のある町へ行くと、いつもこの歌を思い浮かべるのでした。そして「港町ブルース」の歌詞に、その港町があるかないかで、興奮の度合いが違ってくるのです。もちろん歌詞には、今回の目的地、別府も出てくるので、自分の中では、港町ブルース興奮度がマックスに達しておりますて、頭の中では、常に森進一が歩きまわっているような状態でした。

八幡浜の港に出ると、市場や食堂があつて、さきほどのアーケード商店街とは打って変わり、人も多く活気があつて、明るい感じ、われわれは港に併設された「ゴーや食堂」に入り、ボリューム満点の海鮮丼をいただきました。その後、フェリー乗り場の2階にある、昭和の薫りがプンプンする喫茶店でコーヒーを飲みながら、出航を待つことにしました。

フェリーに乗り込むと汽笛が響き、ゆっくりと港を離れて、ミカンの段々畑が遠くなっていきます。乗船時間は約3時間、別府には夕方前に着岸予定です。わたしは、くつろぎモードに入るため、ジャージに着替えて寝転がりました。大きな窓からは太陽の光がふりそそぎ、おっさん同士で駄弁りながら、昼寝をしたり、みかんジュースを飲んだりして、至福の時間を過ごしていました。



熱い！

いよいよ目的地の別府港が見えてきました。向こうの別府タワーが出迎えてくれ、頭の中の森進一は、「八幡浜」から「別府」と唄いはじめます。

東京から飛行機、バス、電車、フェリーを乗り継いで、約9時間かけて到着です。長かったけれど、ちょっとした達成感と疲労感、夜に美味しくお酒を飲むための準備体操となるのでした。

まずは高みから街の全貌を把握しようと、タクシィで別府タワーに向かいましたが、その日はあいにく休館日でした。肩透かしをくらいながら、上からでも下からでも別府の街は変わらないということで、宿に向かいつつ繁華街を散策しながら抜けて行きました。

別府でお世話になる宿は、駅の裏側にある「新ほり井」[map.35.C-d]。街の中心から少し離れていますが、静かで落ち着いた場所です。宿の女将さんに尋ねると、この辺りは昔、料亭街で、「新ほり井」も元は料亭だったそうです。

部屋にいったん荷物を置き、さっそく街に繰り出すことにしました。まずは別府駅のガード下にある「べっふ駅市場」に行き、飲酒態勢に入るため、薬局のおばちゃんお勧めの顆粒ウコンを購入、袋には難しい漢字がビッシリ埋まっています、これは効きそうです。しかし、飲み屋さんが開店するには、ちょっと時間が早いため、とりあえず温泉に行くことにしました。

別府は、ザ・ドリフターズの歌「いい湯だな(ビバノン・ロック)」にも出てくる温泉街です。この歌の作詞は永六輔で、もともとはデューク・エイセスが唄っていたのですが、こちらのバージョンは別府が出てきません。別府は、ザ・ドリフターズ版のみで、「ここは南国、別府の湯」といった感じ、わたしの頭の中は、「港町ブルース」の森進一から、「いい湯だな」のザ・ドリフターズにチェンジして、頭の中では、「ババンババンバンバン」といったフレーズが駆け巡りはじめました。

10分くらい歩くと、地元の人が集まる「紙屋温泉」に到着。中心街から少し



住宅街の路地裏にある。47℃超えの熱湯でも、地元の常連さんたちにとっては「いい湯加減」なんだそう。写真右は店主で共同湯組合長の河村健一さん。(取材後に逝去。ご冥福をお祈りします) ●紙屋温泉／別府市千代町11-27[map.26/D-e]

離れていて、「いい湯だな」とは対照的な場所、入口にはライトがポツンと光り、ひなびた雰囲気があります。ここで頭の中の「バンバンバンバン」は、ようやくおさまってくれました。

入り口で「紙屋温泉」のご主人に挨拶をして、中に入ると、すでにおじさんがひとり、湯からあがったところで、体から湯気を立ちのぼらせていました。「この湯はあたたまるぞお」と、おじさんは言います。わたしは、すぐさま服を脱ぎ、まずは掛け湯で体を流し、いざ湯船の中へ。

「熱い！」

情けないことに瞬時に口から出てきたのは、この言葉でした。しかし気合を入れ直して、グイッと湯船の中へ沈みます。やはり「熱い」。口に出してもどうにもなりません、しばらくすると、この熱さが、心地よさに変わっていきます。

まとわりつく湯が体に浸透してくる感じで、しばらく浸かってから、いったん湯を出て、開いた窓から吹き込む寒風に当たると、とてもなく気持ち良かった。ふたたび湯に浸かり、全身湯たんぽ状態になって湯をあがりました。

その後、外のベンチで、ご主人と話していると、この温泉は江戸時代からあって、それを代々引き継いでいるのだと教えてくれました。歴史の重みが湯の重みとなり、それが体を温めているのだな、などと偉そうなことを思いました。それにしてもわたしは、外に出てから薄着のままでしたが、まったく湯冷めする心配がありません。なるほど良質の温泉というのは、このようなものなのだ、心身ともに感じた次第です。

心も体もボカボカになり、夜のとばりもおりたので、いよいよ飲み屋さんに向かいます。別府初日の夜の1軒目は、「チョロ松」[map.27/E-d]です。ここは郷土料理の店、銅製のマグに入ったビールは冷たくて、しよっぱなからとんでもなくいい気分させてくれました。それから名物のかも吸いを食べました。コクのあるスープに鴨の肉、さらに体があたたまっていきます。ちょうどいい頃合いで、われわれは店を出て、ふたたび別府の街をさまよいます。

ドーナツとボクシング

ネオンが光りはじめた街は、さきほどよりも賑やかで、歩いているだけでもワクワクしてきます。「なんかいい店ないかな」と、うろついていると、路地の入り口に、「いかんぞう・健康居酒屋」なる看板を発見。

「健康居酒屋？ いかんぞう？ ん？ 胃と肝臓？」

看板の前でトンチを解説してもしようがないので、店に入ってみることにしました。なんだかわけのわからないものがゴチャゴチャしている店先で、少し勇気がいりましたが、意を決して扉を開けますと、カウンターでは、数人の地元の方が飲んでいました。

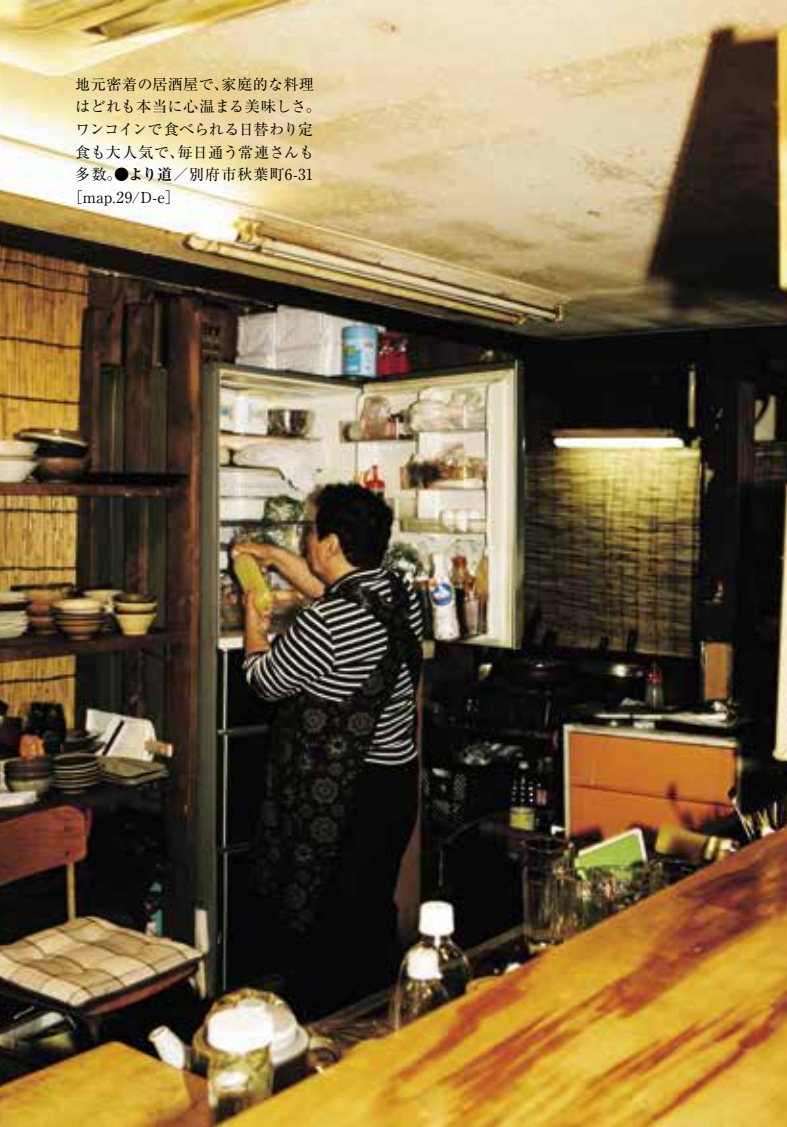
われわれは奥の座敷へ通され、焼酎に、ごぼうのペペロンチーノを注文しました。「健康居酒屋とはいったい、どういう意味なのですか？」と尋ねると、ご主人のお父さんが病気になる、体にいいものを考えて料理するうちに、様々な料理が開発されたそうです。ちなみに、ごぼうのペペロンチーノは、新しい発見で、とても美味しかった。他にも、グミ、銀杏、キウイなどを潰け込んだお酒もあったりして、ラベルには効能が書いてあります。また、このお店は、ご主人の趣味で集めた清涼飲料水のボトルキャップのおまけがものすごいことになっていて、店内に飾ってあります。スターウォーズ、スーパーマリオ、笑点、吉本新喜劇、サザエさん、キティちゃんなどと、こちらも一見の価値あります。

酔いもまわり、小腹が空いたころ、もう一軒ということで、お次は別府で大人気の酒場「より道」へ向かいます。路地の向こうで赤提灯がゆれていて、中に入ると、大きなカウンターの奥に黒板があり、本日のお勧めが書いてありました。このお店は、ご主人と、そのお母さんで営んでいて、老若男女問わず賑わっています。とにかく出てくる料理がすべて美味しく、せせり、とり天、箸も進んで、酒も進んでしまいます。隣に座っていた、男子2人、女子2人のグループと話すと、女子2人は別府生まれ、男子のうちのひとり



お酒も料理も、店主のこだわりと健康的なウチが詰まったメニューがた〜くさん。店の看板には「美容」「健康」「老化防止」が掲げられていました。
●健康居酒屋 いかんぞう／別府市中央町1-27〔map. 28/D-d〕

地元密着の居酒屋で、家庭的な料理
はどれも本当に心温まる美味しさ。
ワンコインで食べられる日替わり定
食も大人気で、毎日通う常連さんも
多数。●より道／別府市秋葉町6-31
[map.29/D-e]





東京からやってきて、別府の大学に通っているそうです。より道は美味しいからよく来るそうで、こんなに美味しいもんばかり食べられるのなら、毎日でも通ってしまおうと思った次第です。お腹も満たされて、酔いもまわって、お店を出ました。

「いい湯だな」の歌詞には、「ここは南国く別府の湯」とありますが、いくら南国でも冬の夜は寒い。しかし温泉とお酒と美味しい食べ物で、体内は南国状態で、上機嫌で夜道を歩いておりますと、われわれの前に突然、若者2人があらわれました。「なんだ？ 酔っ払いのおやじをターゲットにしたカツアゲか？」と思ひ少し身構えますと、彼らは元気に、「ドーナッツを買ってください！」と言ってきました。

「ドーナッツ？」

ちょっと混乱しましたが、南国状態のわたしは、「ハイ買いましょう」と言っ
てしまい、よくわからないまま、ドーナッツを購入してしまいました。それ
にしても、あの若者たちは、何だったのでしょうか？





地元の重鎮?たちが集うスナックは3,000円で飲み放題&歌い放題。「最近では北浜もボクツクリが多いから気をつけな〜」と、美人ママさんが教えてくれた。●アールデコ/別府市北浜1-11-19 2F[map.30/E-d]



われわれが次に向かうのはスナック、店名は「アールデコ」。幾何学模様のバッチシ効いた芸術的なスナックかと思いきや、清潔で明るく、店内も広くて、健康的なスナックでした。しかしお客さんが、ものすごく濃かった。

次から次へと別府在住の濃い顔ぶれがやってくるのです。料亭を経営しているというおじさんは、首に赤いマフラーを巻き、最初は「いや俺なんて」といった感じでしたが、喋り出すと、とんでもないマシガントーク。このマシガンは永遠に続くのかと思っていたら、弾が切れたのか、突然店からいなくなっていて、去り際も、よくわからなくて最高でした。福祉介護の会社をやっているスキンヘッドのおじさまは、豪快に「ガッハハハ」と笑い、別府に歌手や芸能人を呼んだりしたこともあるそうで、この街の名士なのでしょう。他には、別府の街を盛り上げようと奔走している若者がいたり、とにかくみんな別府が大好きで、元気な人ばかりでした。

さらに別府のボクシングジム「ダッシュ東保ボクシングジム」の会長さんもやってきて、店は大盛り上がり。アールデコは、落ち着いた雰囲気のご夫婦が経営しているのですが、息子さんの小畑武尊さんは、ダッシュ東保ボクシングジムの選手で、新人王戦を勝ち進み、なんと後樂園ホールで行われる、新人王決定戦に出場することが決まりました。この快挙に別府の街も盛り上がっていて、大分のテレビ番組で特集も組まれるほど。すると店内のカラオケモニターで、小畑武尊選手の特集が組まれた番組の録画映像が流れはじめ、お客さん全員でテレビを観て、またまた大盛り上がり。

その後もお店には、別府在住の濃い方々がぞくぞく集まってきて、飲みや歌えの大賑わい。しかし、わたしの頭の中は、アール・デコ調の幾何学模様がモゾモゾ動きはじめ、そろそろ限界になってきたので退散しました。宿に戻ると布団が敷いてあり、そのままゴロンとあいなりました。



別府市が運営する別府競輪は、JR日豊本線の別府大学駅から歩いて10分、国道10号沿いにある。取材当日は別府第5回FⅡ第15回富士通フロンテック杯が開催中。●別府競輪場／別府市亀川東町1-36〔map.31/B-a〕

競輪、一休みして、泥湯、ときどき缶ビール

翌朝はウコンが効いたようで、あれだけアルコールを摂取したのに、二日酔いもなく快適です。さらに宿の温泉に浸かって、朝からさっぱり最高の気分。さて本日午前中のメインは競輪、向かうは別府競輪場、わたしは、のめり込むほど競輪をやっているわけではありませんが、昔から、旅打ち（ギャンブルをしながら各地をまわる）は憧れの行為で、少しばかりそんな気分を味わわせていただくことにします。とくに別府の競輪場は、温泉もあり、旅打ちの方には、天国みたいな場所なのではないでしょうか。でも、大きく負けて地獄にならないように気をつけましょう。

別府競輪では、モーニング競輪というのが行われていて、朝の9時からレースが行われていました。朝なので、人はまばらだろうと思っていたら、駐車場にはすでにたくさん車の車が停まっていました。恐るべしモーニング競輪。競輪場はバンクの向こうに海が望め、最高のロケーション、さらに場内には、温泉施設まであるのです。またまた恐るべし別府競輪です。

レースをはじめる前、入り口脇にある建物でケイリン講座なるものをやっていたのでのぞいてみると、元競輪選手の方が懇切丁寧に競輪のノウハウを教えてくださいました。ラインどり、捲り、逃げ、追い込み、競輪をやらない人にとっては、わけのわからない言葉がたくさん出てきますが、とにかく教わったことを一通り頭に叩きこんで、いざ車券を購入、2レースやりましたが負けてしまいました。

ここで気を取り直して、競輪場内にある食堂で昼から、ビールとおでん、「自分がどんどんなダメになっていく」と思いつつも、もう止まりません。別府競輪は、関東の殺伐とした雰囲気との競輪場とは違って、のんびりした空気が漂っています。一方で、そこにどんな魔力が潜んでいるようで、ビールを飲みながら、新聞をながめ、数レースを予想して、ふたたび車券を購入しましたが、また外れてしまいました。



休

外れ車券を握りしめていたら、昼時になり、街中に戻って、別府市役所の方がお勧めの、「一休み」という食堂へ向かいました。この食堂は、カウンターの上に大皿のおかずが、ドローンと並んでいて、そこから好きなものを皿に盛って食べる形式です。おかずは、どれも美味しく、優しいけれどしっかりと味付けで、疲れを吹き飛ばしてくれます。すると店のお母さんに、「イワシのフライ食べる？」と訊かれたので、「はい」と答えると、大皿にはなかったイワシを揚げてくれました。なんだか知り合いのおばさんの家に行って、ご飯を作ってもらっている感じで、このアットホーム感もたまりません。

さらに揚げてもらったイワシが、とんでもなく美味しかった。大袈裟ではなく、わたしの人生で食べてきたイワシフライの中で一番気がします。隣



7席ほどの小さなカウンターの上には、大皿にのった家庭料理がズラリと並ぶ。しかも、500円ですべて食べ放題！お昼時はひっきりなしにお客さんが。●一休み／別府市楠町1-18[map.32/D-e]



の席で食事をしていたおじさんも、イワシフライを貰っていたので、わたしが使ったソースを渡すと、「おれはウスターソースじゃねんだ」と言って、濃いソースをカウンターの奥まで取りに行っていました。わたしの場合、揚げ物は、ウスターソース派なので、おじさんと、しばしソース談義をしながら食事をしました。それにしても一休み、恐るべし、カウンターに並べられたおかずの数々には、天国がひろがっているのです。

われわれは、少しばかり天国に近づいたため、昨日は休館で登ることのできなかった別府タワーの展望階に登りました。別府タワーの、竣工は1957年で、60年もの歴史がある建物。昭和の薫りが残っているのが好ましく、中途半端な高さ(褒めてます)もとてもいい感じですよ。そこで、街を見下ろしながらコーヒーでも飲もうと思ったのですが、展望階には、なにやら手作業をしながら受付をしているおばちゃんが、ラストボスのように鎮座していて、彼女にコーヒーを頼むと、「コーヒーはない」と言われてしまいました。メニューには書いてあったのですが、あいにくコーヒーは切られているようで、どちらにしろラストボスには敵わないので、断念することにしました。

しかし「コーヒーを飲みたい」となってしまう以上、その気持ちは抑えがたく、われわれはコーヒーを求めて別府の街に戻り、「喫茶なつめ」[map33/E-d]に行き、温泉水を使った温泉コーヒーをいただきました。このコーヒー、まろやかでとても美味しかったです。コーヒーは、空から見下ろして飲むものではなく、地面から湧き出るものを感じながら飲むのだと思った次第です。

その後、ここで、ひと風呂浴びようということになり、山の上にある「別府温泉保養ランド」[map34/A-a]へタクシーで向かいました。山の斜面からは、あっちこっちで湯煙が立ちのぼり、これまた旅情をそそります。

到着した別府温泉健康ランドは、昔の小学校の校舎みたいな建物で、これまでたひなびた雰囲気が高かったです。泥湯では、泥を体に塗り込み、あたたまったところで、木造の講堂みたいな休憩場で寝転がっていました。が、いてもたってもいられなくなりビールを購入、やはり温泉の後のビールは最高です。



写真右：店内を物色していると、九州の地酒を次から次へと試飲させてくれました。●酒のコタニ／別府市中央町8-14〔map.35/D-d〕

2日目の夜、酔狂

街に戻って、ふたたび「べっぶ駅市場」の薬局に寄り、ウコンを購入。その後、近くの酒屋さん「酒のコタニ」をのぞきました。このお店には、たくさん種類の酒が置いてあり、お土産にお酒を購入したい方にはお勧めです。さらに試飲もさせてくれますので、じっくり選べます。わたしも試飲させていただき、6杯くらい焼酎を飲んだら、体が熱くなり、いよいよスイッチが入ってきました。

さあ、いよいよ別府の夜2日目開幕です。「いい店はないかあ」と路地をさまよい、見つけたのは赤提灯のぶら下がる「喜楽」。ここでビールに、とり天と刺身をいただきました。「やっぱり、とり天に、ビールは合う」など知ったようなことを語っていると、お店のカウンターには「礼文島」と刺繍してある帽子をかぶったおじさんがいました。九州で北海道の礼文島グッズを見るのは、ちょっと不思議な感じでした。

さて次の店はでしょうか？ ふたたび路地をさまよって見つけたのが、「香凛」という餃子屋さん。店のママさんは中国出身で、十数年前に留学生として別府に来て、その後、この店をひらいてひとりで切り盛りしています。餃子は、皮も手作りで種類も豊富、ママさんが、ひとつひとつ丁寧に餡を包んでくれます。どれも肉汁たっぷりの絶品餃子、あまりにも美味しいので、わたしは調子こいて、紹興酒をガブガブ飲んでいました。

店を出ると、今回の別府企画に、他のグループで参加の青柳文子さんと遭遇。青柳さんは別府出身で街のことも詳しく、合流して「韓国風ろばた高麗房」へ行きました。

名物の蒸し豚は、ママさんが食べ方の伝授をしてくれます。まずはレタスに蒸し豚をのせて、ニンニクやキムチ、ネギやタレをのせて包み込みます。「はい、口開けて」、蒸し豚を包み込んだママさんに言われ、口を開けると、わたしの口にスポンと押し込んでくれました。「こりゃ美味しい」、豚肉は柔らか



ニンニクや唐辛子などをたくさん使った韓国料理で、エネルギーを補充。名物の蒸し豚もさることながら、チャプチェも絶品でした。●韓国風ろばた
高麗房／別府市元町5-8[map.37/E-d]



新宮通りから1本入った裏路地にある、中国東北部の家庭料理専門店。パリエーション豊富な大ぶりの大陸餃子は、1人1個単位で注文するスタイル。
●小厨房 香凛／別府市元町10-1
[map.36/E-d]



裏銀座で営業を続けて60年。路地裏に灯る「峰」の大きな看板が目印だ。チャージなし、カクテルは1杯500円からという良心価格。80歳を超えるマスターも元気！●峰シティパブリック／別府市北浜1-9-3〔map.38/E-d〕



く、包まれたネギやキムチの絶妙なハーモニー、あまりにも美味しいので、わたしは調子こいて、マッコリをバツコンバツコン飲みはじめていました。それにしてもマッコリをどのくらい飲んだのでしょうか？ テーブルにはボトルが何本も転がっていて、わたしは次第に正体がなくなってきたようです。目が三白眼になってしまい、上に行った黒目が戻ってきました。そんな感じで座頭市のモノマネをはじめたらしく、ここから記憶が曖昧になっていきます。店を出てからの記憶はまったくなくて、後日、田附さんの写真を頼りに記憶を辿ってみるものの、やはり思い出せません。

写真を見ると、わたしはとても素敵なバーにいました。そこは「峰シティパブリック」というバーです。一緒に飲んでいたみなさんから聞くと、

は、このバーでわたしは、気取ってベルノ酒なんぞを頼んでいたようです。しかし、少し濃かったらしく、飲んだ瞬間「まずい」と口走ったそうで、すみません。気取って普段飲まない種類のお酒なんて頼んだのが、いけなかった

のです。その後、田附さんの写真を見ると、カラオケを歌ったり、柱に絡み

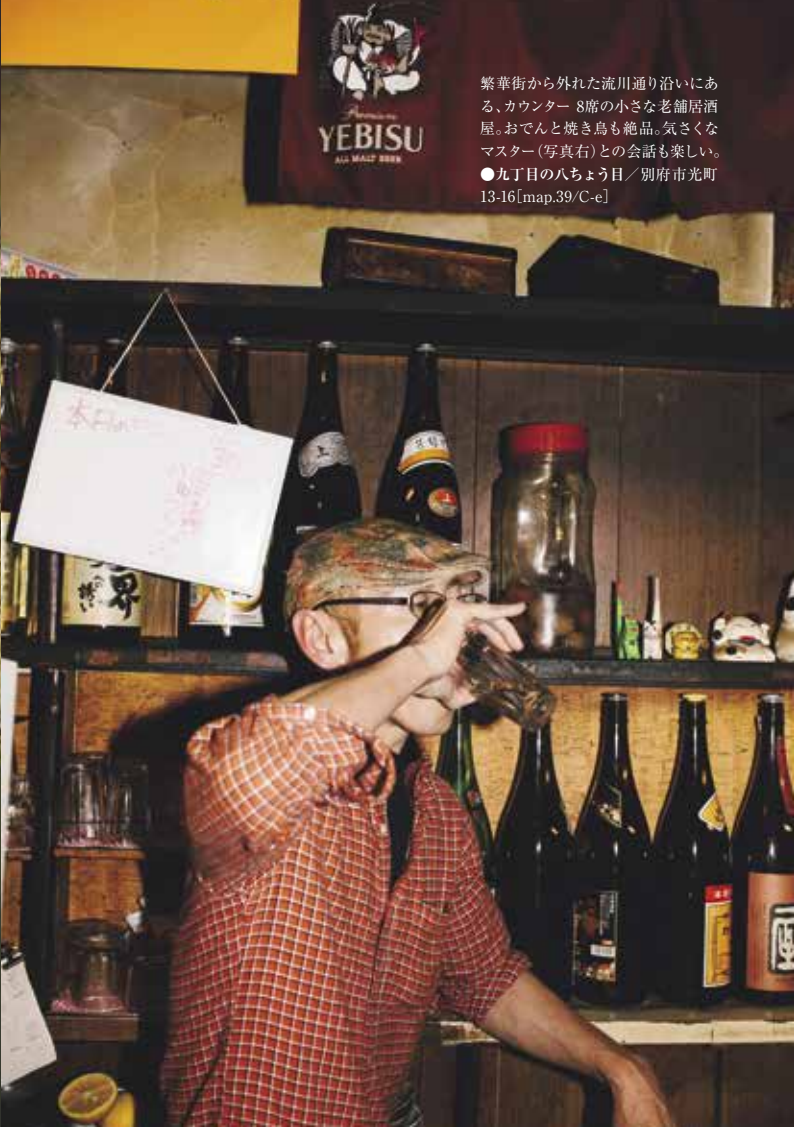


ついたり、カウンターに突っ伏していた様子で、まったくもって申し訳ありません。暴れたり、絡んだりすることはなく、あくまで陽気にやっていたらしいのですが、あのような素敵なバーで、わたしのような存在は、やはり失礼だったかもしれません。しかし、そのようなわたしにも微笑んでくださった、チェックのベストを着たマスターの笑顔の写真に救われました。でも、本当にすみませんでした。今度は酔っ払わないで行くので、ビシッとした気持ちで、ウイスキーを飲ませてください。「もう二度と来るな」と言われてしまったら、どうしようもないのですが。言い訳をすれば、食べ物美味しくなかったので、ビールにレモンサワー、紹興酒のちゃんぽん、そしてマッコリを飲みすぎました。ようは酒を飲んで、酒に飲まれた結果の馬鹿者でした。記憶が戻ると、わたしは夜道を歩いていました。皆さんに、「これからどこに行くのでしょうか?」と尋ねると、『九丁目の八ちよう目』にラーメンを食べに行く』とのこと。

「え? 九丁目の八ちよう目?」

混乱しました。どうも『九丁目の八ちよう目』というのは、居酒屋の店名らしいのです。酔った頭には、とても混乱する名前でしたが、なんとか『九丁目の八ちよう目』に到着。店の在処が本当は何丁目なのかは、いまだにわかりませんが、ここで締めラーメンをすりました。それまで正体なく酔っていたのに、ラーメンを完食したのは、とんでもなく美味かったからです。カウンター席には、以前はトラックを運転していたというイカしたおじさんがいて話をしていると、田附さんが、いろいろとトラックのことに詳しく、感心していたのですが、後で、田附さんはデコトラの写真集を出していたのだということを思い出した、体たらくです。このように、ヘロヘロな状態で宿に戻り、布団の中に潜り込んでみたものの、天井がぐるぐるまわり、挙げ句の果てに、別府の街がまわっていました。街はネオンの残像が円をかき、とても綺麗でしたが、同時に気持ちも悪くなってきました。





繁華街から外れた流川通り沿いにある、カウンター 8席の小さな老舗居酒屋。おでんと焼き鳥も絶品。気さくなマスター(写真右)との会話も楽しい。
●九丁目の八ちょう目／別府市光町
13-16[map.39/C-e]



田井昭人

いぬい あきと／1971年、東京都出身。作家、小説家。パフォーマンス集団「鉄割アルバトロスケット」主宰。2009年に「まずいスープ」（新潮社）で作家デビュー。2016年、『のろい男 俳優・亀岡拓次』（文藝春秋）で第38回野間文芸新人賞受賞。俳優としても映画やドラマに出演する。

田附 勝

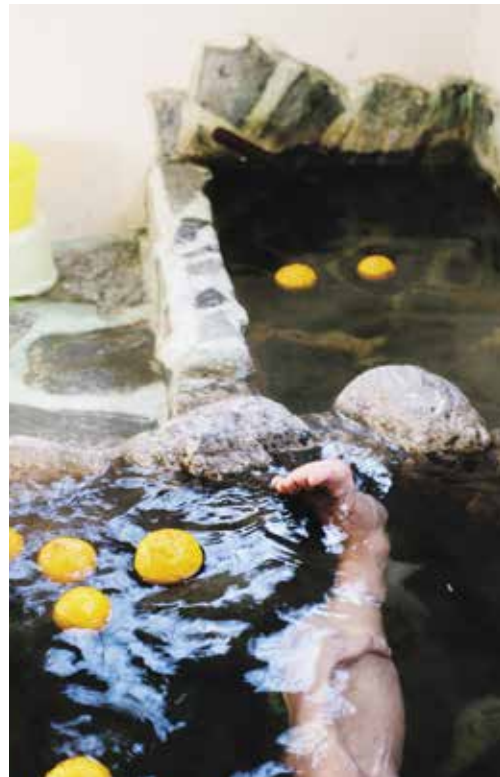
たつき まさる／1974年、富山県出身。写真家。2007年に、デコトラとそのドライバーを被写体にした写真集「DECOTORA」を発表。2011年に発表した写真集「東北」（ともにリトル・モア）で第37回木村伊兵衛写真賞受賞。2015年に写真集「魚人」（T&M Projects）を発表。

極楽酩酊別府地獄

翌朝、目を覚ますと、ウコンの効果も虚しく、二日酔いの真っ只中、宿の風呂で酒を抜こうと必死に浸かってみたものの、脳みそはグラグラするばかり。それから郊外の喫茶店に行き、あんトーストにコーヒーマーニングセットを食べました。二日酔いの体には、あんこの優しさが染み入ります。

その後、住宅地にある、「茶房たかさき」へ向かいました。ここには喫茶利用者が入れる温泉風呂があり、早速、ひとつ風呂浴びさせてもらいました。こぢんまりした気持ちのいいお風呂で、お酒がどんどん抜けていく気がしました。それから、太陽の陽に照らされ、庭を眺めながら、アイスコーヒーを飲んでみると、ようやく現世に戻ってこれた気がしたのです。

別府温泉は、極楽なのか地獄なのか？ 飲みすぎて多少の地獄を味わいましたが、3日間のことを思い返すと、この街の魅力は、やはり現世から少し離れたところにあるのかもしれない、などと偉そうなことを思って、頭の中では「ババンババンバン」が流れていくのです。



オーナーの高崎夫妻宅を改装したカフェを利用すれば、併設された手作りの岩風呂が楽しめる。「この場所はとても気がいいから、元気が出るよ」とは高崎さん。●茶房たかさき／別府市朝見1-2-11[map.40/B-b]

BEAMS EYE on BEPPU

2月7日(水)より、ビームスジャパンにてイベント「BEAMS EYE on BEPPU」を開催。
ビームスと別府市内のさまざまな作り手たちによるコラボレーションプロダクトの販売のほか、本誌内で掲載した写真の展示も。

また、3月28日(水)からは別府市内でも同様のイベントを開催。

―東京―

開催期間 2018年2月7日(水)～3月6日(火)
会場 BEAMS JAPAN (F)
住所 東京都新宿区新宿3-32-6 B1F・5F
電話 03-5368-7300
ウェブ www.beams.co.jp/special/eyan/japan

―別府―

開催期間 2018年3月28日(水)～4月16日(月)
会場 SELECT BEPPU
住所 大分県別府市中大町9-33
電話 0977-807226
ウェブ selectbeppu.thbase.in

まるで湯けむり。

Short Series of BEPPU by BEAMS

別府を訪ねた
3つの短い旅の記録

2018年2月7日発行

Editorial Direction 川田洋平 KAWATA 神田春樹 KONAKI
Edit 安齋瑞納 KONAKI
Art Direction & Design 小酒井祥悟 SHUN 眞下拓人 SHUN 横山佳穂 SHUN

― column ―
Photography 下屋敷和文
Text 大志摩徹 DAISHI 飯田ネオ

Cooperation by 別府市

Printed in Japan ©2018 BEAMS Co., Ltd.
www.beams.co.jp



FREE